中学校　保健体育

1 「目標」

心と体を一体としてとらえ、運動や健康・安全についての理解と運動の合理的な実践を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てるとともに健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かな生活を営む態度を育てる。

ここがポイント！

(1) 心と体を一体としてとらえること
(2) 生涯にわたって**運動に親しむ資質や能力**の基礎を育てること
(3) **健康の保持増進**と**体力の向上**を図ること

2 「内容」

ここがポイント！

運動領域においては、学習内容の確実な習得を図るため、小学校１年から高校３年までの12年間を発達特性から4・4・4のまとまりでとらえ、指導内容が体系化・明確化された。

【発達段階のまとまり】

小学校		中学校	高等学校
小学校1年～小学校4年	小学校5年～中学校2年		中学校3年～高等学校3年
様々な動きを身に付ける時期	多くの運動を体験する時期		少なくとも一つのスポーツに親しむ時期

【指導内容の体系化（運動領域）】

	領域及び領域の内容	１　年	２　年	領域及び領域の内容	３　年
A	**体つくり運動** ア 体ほぐしの運動 イ 体力を高める運動	必　修	必　修	**体つくり運動** ア 体ほぐしの運動 イ 体力を高める運動	必　修
B	**器械運動** ア マット運動 イ 鉄棒運動 ウ 平均台運動 エ 跳び箱運動	必　修		**器械運動** ア マット運動 イ 鉄棒運動 ウ 平均台運動 エ 跳び箱運動	B、C、D、Gから①以上選択
C	**陸上競技** ア 短距離走・ﾘﾚｰ、長距離走又はﾊｰﾄﾞﾙ走 イ 走り幅跳び又は走り高跳び	必　修		**陸上競技** ア 短距離走・ﾘﾚｰ、長距離走又はﾊｰﾄﾞﾙ走 イ 走り幅跳び又は走り高跳び	
D	**水泳** ア クロール イ 平泳ぎ ウ 背泳ぎ エ バタフライ	必　修		**水泳** ア クロール イ 平泳ぎ ウ 背泳ぎ エ バタフライ オ 複数の泳法で泳ぐ又はﾘﾚｰ	
E	**球技** ア ゴール型 イ ネット型 ウ ベースボール型	必　修		**球技** ア ゴール型 イ ネット型 ウ ベースボール型	E、Fから①以上選択
F	**武道** ア 柔道 イ 剣道 ウ 相撲	必　修		**武道** ア 柔道 イ 剣道 ウ 相撲	
G	**ダンス** ア 創作ダンス イ フォークダンス ウ 現代的なリズムのダンス	必　修		**ダンス** ア 創作ダンス イ フォークダンス ウ 現代的なリズムのダンス	B、C、D、Gから①以上選択
H	**体育理論** (1) 運動やｽﾎﾟｰﾂ多様性 (2) 運動やｽﾎﾟｰﾂが心身の発達に与える効果と安全	必　修	必　修	**体育理論** (1) 文化としてのｽﾎﾟｰﾂの意義	必　修

運動の取り上げ方の弾力化
体つくり運動、体育理論以外は２学年のいずれかの学年で指導可能

３年生で選択の開始、運動の特性や魅力に応じて選択のまとまりを見直す

Ａ体つくり運動
体力の向上を重視し一層の充実を図る。全学年で必修（各学年７単位時間以上）

Ｅ球技
特性や魅力に応じて、３つの型に分類

Ｆ武道　Ｇダンス
１・２年において必修

Ｈ体育理論
全ての学年で必修、各学年３単位時間以上

【指導内容の明確化】

（例）

１・２年　Ｃ　陸上競技
短距離走・リレーでは、滑らかな動きで速く走ること、・・・・
〈例示〉・リレーでは、前走者の渡す前の合図と、次走者のスタートのタイミングを合わせて、バトンの受け渡しをすること。

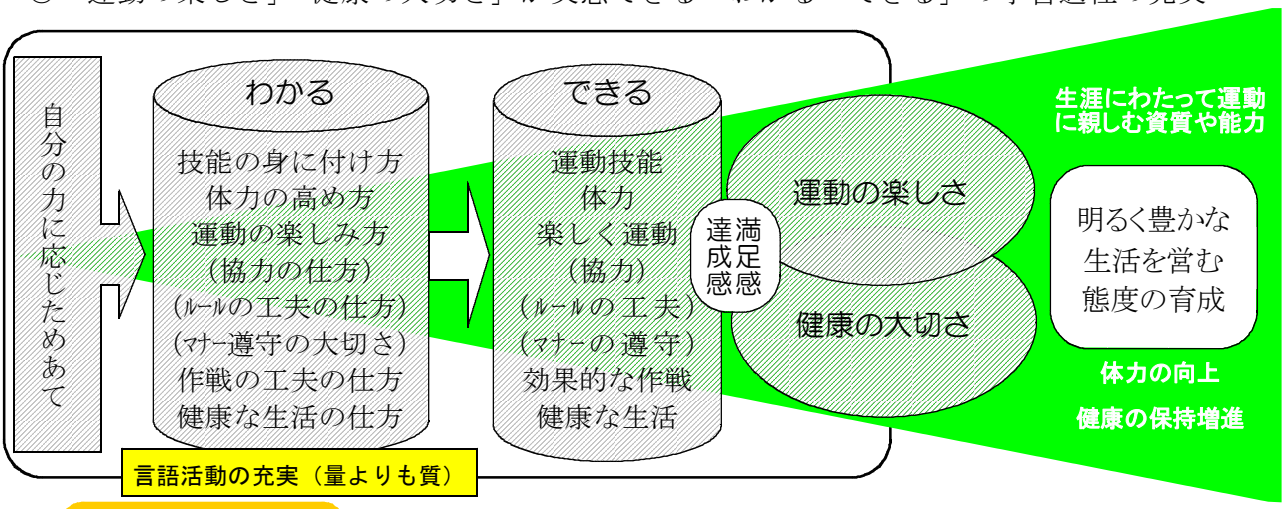
身に付けさせたい内容を明確に示す

3 「指導計画の作成と内容の取扱い」における留意事項

(1) 体育分野の「体つくり運動」、「体育理論」は、各学年で必修とし、各学年で配当する授業時間数を示した。それ以外の領域については、**第１学年及び第２学年における領域の取上げ方の弾力化を図り、その内容の習熟を図ることができるよう考慮**する。
(2) 保健分野は効果的な学習が行われるよう**適切な時期にある程度まとまった時間を配当**する。
(3) 体力の測定については、**計画的に実施し、運動の指導及び体力の向上に活用**する。

4 新学習指導要領の趣旨や内容に対応した授業改善

○「運動の楽しさ」「健康の大切さ」が実感できる「わかる→できる」の学習過程の充実



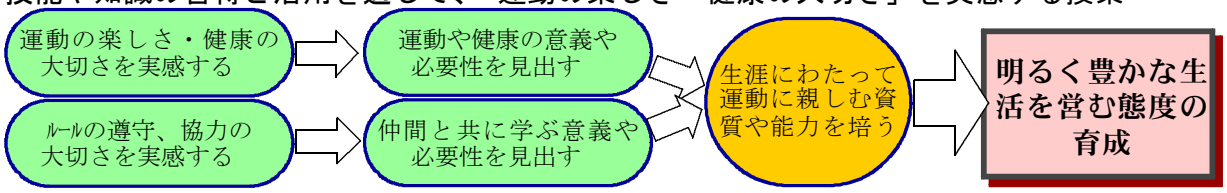
ここがポイント！

すべての子どもに「運動の楽しさ」を味わわせるためには、スポーツ種目の既存のルールにこだわらず、体育施設等の環境や子どもの実態に応じて、ルールを簡易化したり、工夫したりすることが必要である。

5 ３つの基軸の視点による授業改善

(1)「キャリア教育」の視点から

技能や知識の習得と活用を通して、「運動の楽しさ・健康の大切さ」を実感する授業



(2)「コミュニケーション能力を育む教育」の視点から

自分の思いや考えを表現したり伝え合ったりする学習活動から学びを深化・充実させる授業

①互いの協力が必要になる課題の設定
②練習や作戦を考え、改善の方法などを互いに話し合う活動の設定
③他者の意見（見方や考え方）に対する支持的・受容的風土の醸成
④学習活動における「表現すること」や「学び合い」に対する形成的評価の実施

ここがポイント！

○体育分野では、仲間やチームの課題に応じた作戦について話し合う展開の設定
○保健分野では、ブレインストーミングや心肺蘇生法などの実習、実験、課題学習などを取り入れた学習の展開

(3)「地域や伝統、文化を踏まえた教育」の視点から

武道の授業においては、より一層伝統や文化にふれる指導を充実

6　３つの基軸の視点による展開例

◇コミュニケーション能力を育む教育の展開例

ここがポイント！

＊　保健体育科においては、教科の目標を実現するための手だてとして、言語活動を充実することが必要であり、その結果としてコミュニケーション能力が育まれていきます。特に体育分野の学習においては、話合いの時間を多くとるのではなく（運動を行う時間が不足する）、話合いや情報交換の質を高めることにより、動きの質を高めていかなければなりません。そのためのポイントとして以下の３点が重要です。

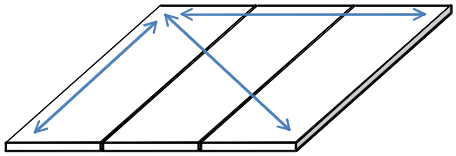
○話合いに必要な適切な情報の獲得（ねらいやめあての明確化）
○体育としての情報の活用の仕方の指導（動きの言語化や動きのポイントの焦点化）
○情報の活用の場（コミュニケーションの場、互いに学び合う・教え合う場や情報を共有する場）の提供

１　題　　材　　ペアでシンクロ演技を発表しよう　　第２学年　器械運動（マット運動）

２　ね ら い

ペアで、回転系（接転・ほん転）と技巧系の基本的な技を選び、話し合う中で、滑らかで息が合った演技ができるようにする。

３　学習過程　（２時間）

学 習 内 容・学 習 活 動	指導上の留意点
1　自分でできる技を確認し、ペアとなる友達と、互いの技の特徴を説明し合うことで、シンクロできそうな演技内容のイメージをつかむ。	個人種目の題材として扱われることも多いが、ペアのシンクロでの演技を前提として取り組ませることで、コミュニケーションの場を意図的につくります。 コミュニケーション能力
2　学習カードに自分たちが行う演技内容と動きを図示し、練習する。  ※前後左右にダイナミックな動きができるようにマット３枚程度を寄せ合わせて「床」とする。 授業改善の視点	○各ペアの技能に応じて、技群（接転・ほん転・平均立ち）の要素をできる限り幅広く取り入れ、演技できるように促す。 ○各ペアの技能に応じた演技内容になっているか確認する。 ○練習時に話合いが効率よく短時間に行えるように、学習カードに技のポイントを示したり、映像機器（デジタルカメラ等）の動画機能を活用できるように予め説明しておく。 ＩＣＴ活用
3　他のペアと互いに演技を披露し合い、評価し合う。	○他のペアの演技を評価するポイントとして、「よい点」と「改善点」の両面を心がけるように促す。 言語活動の充実
4　「滑らかで息が合った演技」を目標に技の組立ての検討→変更→再練習を行う。	
5　本時の学習活動を自己評価する。	○自己評価によって、学習内容の理解度や各自・各ペアの課題を確認できるようにする。

◇地域や伝統、文化を踏まえた教育の展開例

ここがポイント！

＊　武道（剣道）の学習の充実を図るためには、室町時代から戦国時代までの甲冑を着けて行う「戦（いくさ）」のための剣術から、剣術修行のため、竹刀・防具を用いて稽古し合う江戸時代の剣術へと変遷してきたことを理解させることが効果的です。

　このことが現代剣道の基本となる技を正しく習得するための知識となり、剣道の学習の充実につながります。

１　題　　材　　剣術と現代剣道は何が違うのだろう　　第１学年　武道（剣道）

２　ね ら い

戦国時代に代表される剣術から、竹刀を用いての剣道として変遷・発展してきた経緯を理解し、我が国の文化にふれることで、剣道の基本となる技を習得する手がかりを得ることができる。

３　学習過程　（２時間）

学 習 内 容・学 習 活 動	指導上の留意点
1　日本の「戦」の歴史的変遷を知る。 ・歴史書やテレビドラマ等からイメージできる戦国時代の武士の姿を考える。 ・江戸時代の武士の姿との違いを比べる。 地域や伝統、文化	○武田信玄や伊達正宗等、戦国大名の合戦姿と、幕末の坂本龍馬や新撰組の姿を想起し、違いに気付くようにする。 ○学習カードや資料（ビデオ）を用い、「集団の合戦」から「個人対個人の決闘」の手段としての剣術に変わっていくことや、竹刀や防具の開発が、現在の剣道の基本的技能の原型であることを理解できるようにする。
2　鎧（甲冑）の重さを知り、装備による動きの違いを考える。 ［甲冑を装着したときの動きの予想］ ・機敏な動きができない ・脚を開いて、腰を落とす姿勢 ・半身になる　　等 	○鎌倉時代の大鎧（30kg）、戦国時代の甲冑（25kg）のおよその重さを知らせ、甲冑を装着したときの動き（戦い方）を想像して、学習カードに各自記入入するよう助言する。 例えば、２kgの砂袋（合計10個）を頭・肩・腰に固定し、動いてみたり、竹刀を振ってみたりして、甲冑を装着したときのような疑似体験をすることで、現在の剣道具がいかに軽量で動きやすいかを実感でき、今後、剣道具装着時の「重い」「動きにくい」というマイナスイメージを払拭することができます。 授業改善の視点
3　現在の剣道の基本技能を知る。 ・構え　　・足さばき　　・基本打突	○重い甲冑を装着し、日本刀を武器に戦った武将の動きと、現代剣道の動きは基本的に異なることを確認することで、剣道の基本となる技を正確に習得する手がかりとする。
4　本時の学習活動を自己評価する。	○自己評価によって、学習内容の理解度や課題を確認できるようにする。

学習評価の在り方と指導要録の改善について

中学校　　保健体育

１　評価の観点

(1) 教科の目標

※下線は変更点

【教科の目標】
心と体を一体としてとらえ、運動や健康・安全についての理解と運動の合理的な実践を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てるとともに健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かな生活を営む態度を育てる。

(2) 学力の３要素と評価の観点

学力の３要素	評価の観点（新）	「保健体育」の観点
①基礎的・基本的な知識及び技能	○関心・意欲・態度	○運動や健康・安全への関心・意欲・態度
②思考力、判断力、表現力等	○思考・判断・表現	○運動や健康・安全についての思考・判断
③主体的に学習に取り組む態度	○技能	○運動の技能
	○知識・理解	○運動や健康・安全についての知識・理解

◆評価の観点改善のポイント

・評価の観点の名称は現行のものと同一であるが、教科の目標及び学力の３要素を踏まえて整理されていること、指導内容の明確化が図られていることから、一層指導と評価の一体化を図ることに留意する。
・言語活動を充実することから、思考・判断したことを、その内容を表現する活動と一体的に評価することが重要である。
・ダンスにおいては、「表現」という技能を示す観点があるが、今後も「技能」の観点として評価する。

２　評価の観点及びその趣旨

新

※下線は変更点

観　点	趣　旨
運動や健康・安全への関心・意欲・態度	運動の楽しさや喜びを味わうことができるよう、運動の合理的な実践に積極的に取り組もうとする。また、個人生活における健康・安全について関心をもち、意欲的に学習に取り組もうとする。
運動や健康・安全についての思考・判断	生涯にわたって運動に親しむことを目指して、学習課題に応じた運動の取り組み方や健康の保持及び体力を高めるための運動の組み合わせ方を工夫している。また、個人生活における健康・安全について、課題の解決を目指して考え、判断し、それらを表している。
運動の技能	運動の合理的な実践を通して、運動の特性に応じた基本的な技能を身に付けている。
運動や健康・安全についての知識・理解	運動の合理的な実践に関する具体的な事項及び生涯にわたって運動に親しむための理論について理解している。また、個人生活における健康・安全について、課題の解決に役立つ基礎的な事項を理解している。

３　各観点の趣旨と留意事項

○運動や健康・安全への関心・意欲・態度

〔体育分野〕

・中学校第１学年及び第２学年では、公正、協力、責任及び健康・安全に関する具体的事項を理解させた上で、学習課題に積極的に取り組もうとする様子を評価する。中学校第３学年では、上記に加えて参画に関する具体的事項を理解させた上で、自己の課題に主体的に取り組もうとする様子を評価する。

〔保健分野〕

・「個人生活における健康・安全」に関する関心、学習に取り組む意欲、学習の成果を課題解決に生かそうとしている態度などの実現状況を評価する。

○運動や健康・安全についての思考・判断

〔体育分野〕

・基礎的な知識や技能を活用して、学習課題への取り組み方を工夫できる活動場面の設定が重要である。

〔保健分野〕

・学習内容について、思考・判断したことを説明している状況などを評価する。

○運動の技能

・適切に指導内容を選択し、それらの動きの出来映えを評価する。

○運動や健康・安全についての知識・理解

〔体育分野〕

・運動の行い方や自主的な学習を継続する上で必要となる基礎的事項を学習活動に関連させて指導し、理解している様子を発言や学習カード等から評価する。

〔保健分野〕

・課題解決に役立つ基礎的な事項の理解になるように留意する。

○その他の事項

・信頼性、妥当性のある評価ができるよう評価規準を作成する。
・指導計画に評価計画を適正に位置づける。
・生徒の自己評価や相互評価の機会を適切に取り入れ、言語活動の充実を図る。
・効果的・効率的な評価をめざして、内容の精選及び学習教材等の工夫をする。

４　評価規準作成のための参考資料のポイント

□小学校入学から高等学校卒業までの12年間の体系化を見通して計画を立てるが、学年が第１学年及び第２学年なのか、第３学年かによって、その趣旨の違いを明確にして作成する。

□各運動領域ごとに「評価規準に盛り込むべき事項」「評価規準の設定例」を作成し、「評価規準の設定例」には学習指導要領解説の内容が反映されている。これを参考に、各中学校の実態を踏まえ指導計画を作成し、具体的な評価規準を設定する。

□中学校では「体つくり運動」の「運動の技能」の評価は削除された。小学校では「運動の技能」の評価は例示が特定しやすいという判断から評価を行うが、中学校では、「体力を高める運動では、ねらいに応じて、体の柔らかさ、巧みな動き、力強い動き、動きを持続する能力を高めるための運動を行うとともに、それらを組み合わせて運動の計画に取り込むこと。」としている。このことから、「技能」の観点は「思考・判断」に吸収して扱われるという解釈で、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成する視点から変更された。

□「第１学年及び第２学年」ですべての運動領域を履修することになるが、ある領域を１年間のみ計画するか、２年間にわたって計画するかによって、「評価規準の設定例」にあるような項目を選んで、段階的に評価計画に位置付ける必要がある。

□中学校「第１学年及び第２学年」は小学校５・６年との系統的な指導計画が作成されなければならない。また、「第３学年」については、高等学校とのつながりをもち指導計画が作成される必要がある。各地域の学校間で研修会等を開き、系統的な指導計画・評価計画の充実を図る必要がある。

中学校　技術・家庭（技術分野）

1 「目標」

○技術･家庭科の「目標」
　生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技術の習得を通して、生活と技術とのかかわりについて理解を深め、進んで生活を工夫し創造する能力と実践的な態度を育てる。
○技術分野の「目標」
　ものづくりなどの実践的・体験的な学習活動を通して、材料と加工、エネルギー変換、生物育成及び情報に関する基礎的・基本的な知識及び技術を習得するとともに、技術と社会や環境とのかかわりについて理解を深め、技術を適切に評価し活用する能力と態度を育てる。

ここがポイント！
- **技術と社会や環境とのかかわりについて理解を深めること**ができるようにすること
- **技術を適切に評価し活用できる能力と実践的な態度**を育てること

2 「内容」

A　材料と加工に関する技術
B　エネルギー変換に関する技術
C　生物育成に関する技術
D　情報に関する技術

ここがポイント！
　これまで必修項目と選択項目で示された「技術とものづくり」及び「情報とコンピュータ」の内容構成を４つに改め、**全ての内容を共通に履修させる**ことになった。

3 「指導計画の作成と内容の取扱い」における留意事項

(1) 内容の構成の考え方は現行と同様、**実践的・体験的な活動をより一層充実**させるよう工夫

(2) 内容の構成（**表１**）

①指導を体系的に行う視点から、小学校での学習を踏まえ中学校での３学年間の見通しを立てさせるよう、**第１学年の最初にガイダンス的な内容を必ず履修させる。**「A（１）ア」

②基礎的・基本的な知識と技術を習得させるとともに、これらを活用する能力や社会において実践する態度を育む視点から、A～Dの各内容を次の３つで構成
- 広く現代社会で活用されている技術について学習する項目等
- それらの技術を活用したものづくり（製作・制作・育成）を行う項目等
- ものづくりの経験を通して深めた技術と社会・環境とのかかわりの理解を踏まえ、現在及び将来において利用される様々な技術を評価し活用する能力と態度を育てる項目等

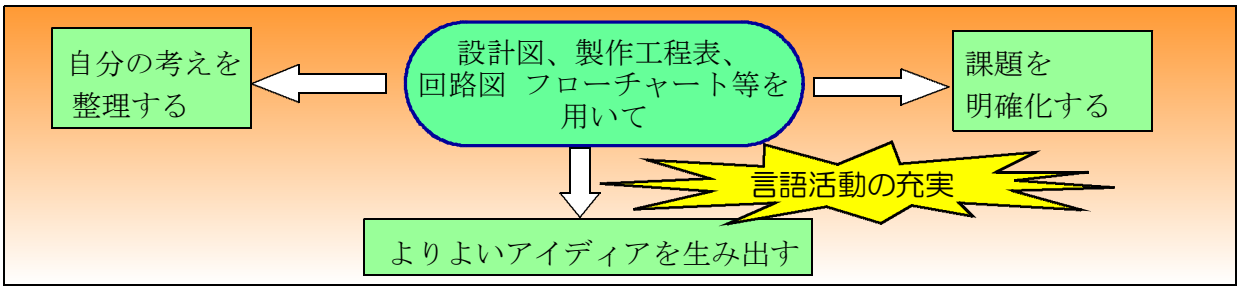
表1　技術分野の内容構成

内容 / 項目	A材料と加工に関する技術	Bエネルギー変換に関する技術	C生物育成に関する技術	D情報に関する技術
広く現代社会で活用されている技術	（2）ア、イ	（1）ア、イ	（1）ア	（1）ア、イ、ウ
技術を評価し活用する能力と態度	（2）ウ	（1）ウ	（1）イ	（1）エ
技術を使用したものづくり（製作・制作・育成）	（3）ア、イ、ウ	（2）ア、イ	（2）ア	（2）ア、イ （3）ア、イ

(3) ３学年間を見通した指導の充実
　87.5時間で教育課程の編成を行うために、題材の厳選、A～Dの４つの内容を相互に**有機的な関連**を図ること等が必要

4　新学習指導要領の趣旨や内容に対応した授業改善

（１）論理的思考や生活の課題を解決する能力をはぐくむ視点の充実



（２）道徳教育との連携

●学習活動や学習態度への配慮
●教師の態度や行動による感化
●技術・家庭科の目標と道徳教育との関連を明確に意識
●道徳の時間の指導との関連を考慮

（３）技術を適切に評価し活用する能力と態度の育成

様々な条件の中で、どのような技術を使うべきなのか適切に評価し活用することができる能力や活用しようとする態度　⇒　技術を適切に管理できる能力

（４）知的財産の保護

知的財産保護の必要性の認識、**知的財産を創造・活用する態度**の育成

5　３つの基軸の視点による授業改善

(1)「キャリア教育の推進」「コミュニケーション能力の育成」の視点から

「かかわり」を生かした活動を通して、自己の変容を実感させる。（**図１**）

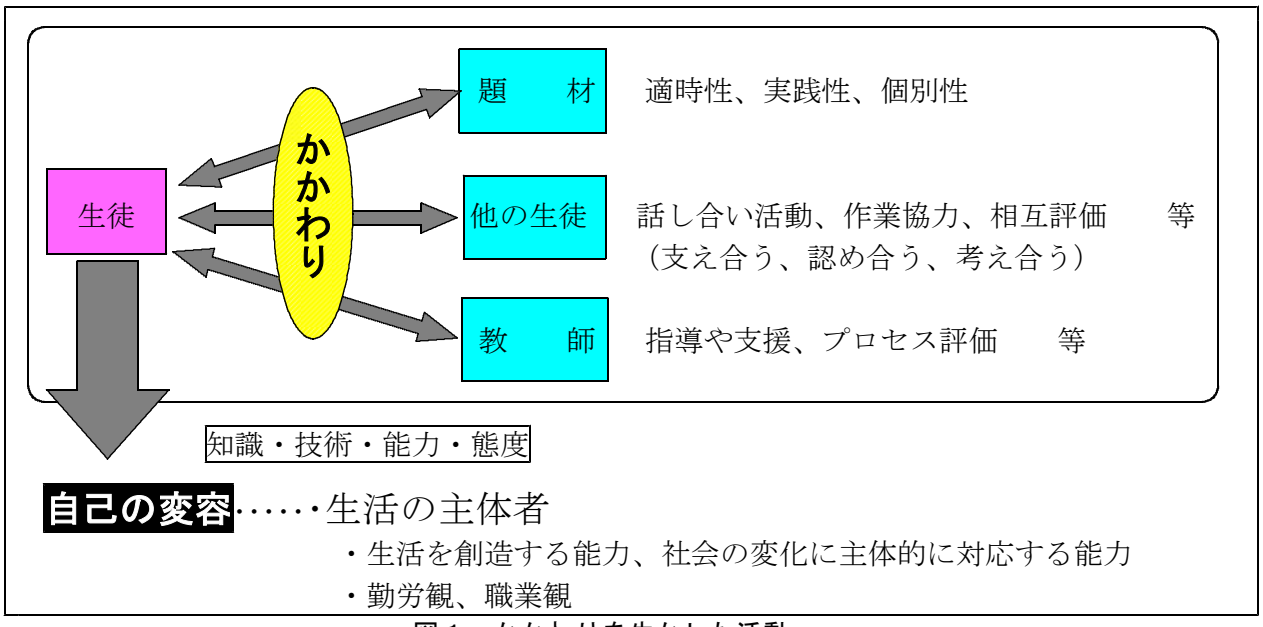


図１　かかわりを生かした活動

(2)「地域や伝統、文化を踏まえた教育」の視点から

●**社会・環境との関連付けを強化**すること等から、技術の果たしている役割について関心を高める。
●学校における学習と家庭や社会における**実践との結び付きに留意**して内容の改善を図る。
●伝統や文化に関する教材を開発し活用する。

6　３つの基軸の視点による展開例

◇コミュニケーション能力を育む教育の展開例

ここがポイント！

＊　生徒が生活を工夫し創造する能力､社会の変化に主体的に対応する能力等を育むために､「かかわり」を生かした活動を通して「コミュニケーション能力の育成」「キャリア教育の推進」を図ります。題材とのかかわり、他の生徒とのかかわり、教師とのかかわりの視点から授業の展開を工夫しましょう。

＊　学習等の結果を整理し考察する活動、教科の特質を踏まえ、設計図や製作工程表のような図表等を用いて考えたり説明したりする活動、情報通信ネットワークや情報の特性を生かして考えを伝え合う活動等を意図的に仕組むことが必要です。

【実践例１】

１　題　　材　　ミニテーブルの設計と製作

２　主　　眼

グループで意見交換すること等を通して使用条件にあった効果的な接合方法を決定することができる。

３　学習過程

学 習 内 容・学 習 活 動	指導上の留意点
１　前時の学習内容の確認をする。 ・様々な木材の接合方法 ・接合方法による強度の違い ・使用する工具や工作機械の仕組みと使用方法	○前時の学習プリント「様々な接合」を確認することで、学習意欲が高まるようにする。 プレゼンテーションソフトウェアを使用して説明すると、生徒が接合について具体的に想起することができるでしょう。 ＩＣＴ活用
２　使用条件に合った効果的な接合方法を考える。 **個人** ・自分の考えをまとめる。	○学習プリントを配付して、接合部分の構想図をかき込むことができるようにする。 ○個別学習により自分の考えをもつことができるようする。 ○使用条件等と関連付けさせることで、接合方法とその理由をまとめやすくする。 まとめられない生徒については、その生徒の断片的な考えを生徒自身の言葉でつなげることができるように支援を行うとよいでしょう。 言語活動の充実
グループ ・自分の考えを発表する。 ・他の生徒の発表を聴く。 コミュニケーション能力	○考えの共通点や相違点を検討させることで、自分の考えを再考しやすくする。 生徒の人間関係等を考慮し、コミュニケーションを図りやすい意図的なグループ構成をする配慮も必要です。また、他の生徒がその接合方法を選んだ理由に焦点を当てて聴くことを指導するとよいでしょう。
全体 ・接合方法を選択するポイントや課題について教師の説明を聴く。	○ポイントや課題となった点について全体で確認をすることで、適切な接合方法を決定できるようにする。

個人 ・教師の説明やグループでの検討内容をふまえ、接合方法を決定する。	○最初の考えと変わった場合も変わらない場合も、接合方法を決定した理由を説明できるようにする。
３　本時の学習活動をまとめる。	○自己評価によって学習への参加状況や、学んだこと等を確認できるようにする。

【実践例２】

１　題　　材　　ロボットの制御

２　主　　眼

自分の考えた方法をフローチャートにかき表し、グループで意見交換すること等を通してセンサを使用した制御プログラムを作成・改良することができる。

３　学習過程

学 習 内 容・学 習 活 動	指導上の留意点
１　前時の学習内容の確認をする。	○前時までの内容について確認させることで、学習意欲が高まるようにする。
２　制御プログラムを考える。	○課題の具体的な内容（条件：「障害物をさけて移動する」等）を明示することで、本時の目標を設定できるようにする。
個人 ・自分の考えをフローチャートにかき表す。 言語活動の充実	○個別学習により自分の考えをもつことができるようする。 考えをうまくフローチャートに表せない生徒には、簡単な図で表すことから進めるよう助言するとよいでしょう。
グループ ・自分の考えを発表する。 ・他の生徒の発表を聴く。 ・グループでフローチャートをまとめる。	○考えの共通点や相違点を検討させることで、自分の考えを再考しやすくする。 自分の考えの発表や、他の生徒の意見を聴く際には、図やフローチャートに着目させることを指導するとよいでしょう。 コミュニケーション能力
３　プログラムを作成し、ロボットを制御して確認する。 **グループ** ・フローチャートをもとにプログラムを作成する。 ・実際にロボットを制御してプログラムを確認、修正する。 授業改善の視点	○グループで互いに協力や評価をさせることで、安心感をもって進めることができるようにする。 制御がうまくできないグループには、フローチャートやプログラムの確認を行うよう指示し、それでも不具合が改善されない場合は、生徒たちの考えを基に、フローチャートやプログラムの確認を生徒たちとともに行うとよいでしょう。
４　本時の学習活動のまとめをする。	○自己評価によって学習への参加状況や、学んだこと等を確認できるようにする。

学習評価の在り方と指導要録の改善について

中学校　技術・家庭（技術分野）

１　評価の観点

(1) 教科の目標

※下線は変更点

【教科の目標】
生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技術の習得を通して、生活と技術とのかかわりについて理解を深め、進んで生活を工夫し創造する能力と実践的な態度を育てる。

(2) 学力の３要素と評価の観点

学力の３要素	評価の観点（新）	「技術・家庭」の観点
①基礎的・基本的な知識及び技能 ②思考力、判断力、表現力等 ③主体的に学習に取り組む態度	○関心・意欲・態度 ○思考・判断・表現 ○技能 ○知識・理解	○生活や技術への関心・意欲・態度 ○生活を工夫し創造する能力 ○生活の技能 ○生活や技術についての知識・理解

◆評価の観点改善のポイント

・評価の観点の名称は現行のものと同一であるが、教科の目標及び学力の３要素を踏まえて整理されていることに留意
・思考・判断したことを、その内容を表現する活動と一体的に評価することが重要なポイント

２　評価の観点及びその趣旨　【技術分野】

※下線は変更点

【技術分野の目標】
ものづくりなどの実践的・体験的な学習活動を通して、材料と加工、エネルギー変換、生物育成及び情報に関する基礎的・基本的な知識及び技術を習得するとともに、技術と社会や環境とのかかわりについて理解を深め、技術を適切に評価し活用する能力と態度を育てる。

新

※下線は変更点

観　点	趣　旨
生活や技術への関心・意欲・態度	材料と加工、エネルギー変換、生物育成及び情報に関する技術について関心をもち、技術の在り方や活用の仕方等に関する課題の解決のために、主体的に技術を評価し活用しようとする。
生活を工夫し創造する能力	材料と加工、エネルギー変換、生物育成及び情報に関する技術の在り方や活用の仕方等について課題を見付けるとともに、その解決のために工夫し創造して、技術を評価し活用している。
生活の技能	材料と加工、エネルギー変換、生物育成及び情報に関する技術を適切に活用するために必要な基礎的・基本的な技術を身に付けている。
生活や技術についての知識・理解	材料と加工、エネルギー変換、生物育成及び情報に関する技術についての基礎的・基本的な知識を身に付け、技術と社会や環境とのかかわりについて理解している。

３　各観点の趣旨と留意事項

〇生活や技術への関心・意欲・態度

・「内容の取扱い」の(5)に示されている「技術にかかわる倫理観」や「新しい発想を生み出し活用しようとする態度」についてもこの観点で評価
・「技術を評価し活用する」目的として、解説に示してある「技術の在り方や活用の仕方等に関する課題の解決」を観点の趣旨に明記
・分野目標やその解説の文章に合わせて、「進んで」を「主体的」に変更し、「評価し」を追加

〇生活を工夫し創造する能力

・「評価し」を追加するとともに、「技術を評価し活用する」目的を明記
・教科目標における「工夫し創造する能力」と分野目標における「技術を適切に評価し活用する能力」との関係を明確にするために表現を変更

〇生活の技能

・材料、加工等の技術（technology）を適切に活用するために必要な基礎的・基本的な技術（skill）が身に付いているかについて評価

〇生活や技術についての知識・理解

・材料、加工等の技術に関する基礎的・基本的な知識が身に付いているか、また、技術と社会や環境とは相互に影響し合う関係にあることを理解しているかについて評価

４　評価規準作成のための参考資料のポイント

□　技術分野においては、学習指導要領の技術分野の内容の「Ａ　材料と加工に関する技術」「Ｂ　エネルギー変換に関する技術」「Ｃ　生物育成に関する技術」「Ｄ　情報に関する技術」のそれぞれの各指導項目を内容のまとまりとして、「内容のまとまりごとの評価規準に盛り込むべき事項及び評価規準の設定例」を作成した。「評価規準の設定例」には学習指導要領解説の内容が反映されている。これを参考に、具体的な評価規準は、指導計画に応じて各学校で設定する。

□学習指導要領の指導事項によっては「評価規準に盛り込むべき事項」を設定していない観点がある。

□「評価規準に盛り込むべき事項」については、すべてのことを幅広く入れている。技術・家庭科の特徴として、ガイダンス以外の各指導事項についてはすべての学年で取り扱うことができるため、学年に応じた評価規準の設定の具体が必要である。

□「内容の取扱い」の(5)に示されている「技術にかかわる倫理観」や「新しい発想を生み出し活用しようとする態度」については、能力ではなく態度であるため、内容にとらわれない。また、「生活や技術への関心・意欲・態度」の観点で評価する。

□３学年間を通して生徒に身に付けさせる力を明らかにし、家庭分野と合わせながら、長期的な視点に立ち、指導計画と一体となった評価計画を作成する。限られた授業時数で４観点を評価することを踏まえ、題材の設定にあたっては、例えばＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄの指導事項を組み合わせることなどの工夫が求められる。

□「評価＝めざすもの」であり、生徒に身に付けさせる力を明らかにした授業を仕組み、指導計画と一体となった評価計画を作成する。

中学校　技術・家庭（家庭分野）

１「目標」

衣食住などに関する実践的・体験的な学習活動を通して、生活の自立に必要な基礎的・基本的な知識及び技術を習得するとともに、家庭の機能について理解を深め、これからの生活を展望して、課題をもって生活をよりよくしようとする能力と態度を育てる。

ここがポイント！

(1) **これからの生活を展望して**、よりよい生活を送るための能力と実践的な態度の育成を重視する。
(2) 衣食住などに関する実践的・体験的な学習活動を通して、生活の自立に必要な**基礎的・基本的な知識及び技術を習得**させる。
(3) 家庭の機能について理解を深め、これからの生活を展望して、**課題をもって生活をよりよくしようとする能力**と態度を育てる。

２「内容」

小学校家庭科の内容との系統性や連続性を重視し、体系化を図った４つの内容とし、すべての内容を履修させる。

新　学習指導要領　(小)	新　学習指導要領 (中) ←	平成10年告示　学習指導要領 (中)
A家庭生活と家族	A家族・家庭と子どもの成長	A生活の自立と衣食住
B日常の食事と調理の基礎	B食生活と自立	B家族と家庭生活
C快適な衣服と住まい	C衣生活・住生活と自立	
D身近な消費生活と環境	D身近な消費生活と環境	

ここがポイント！

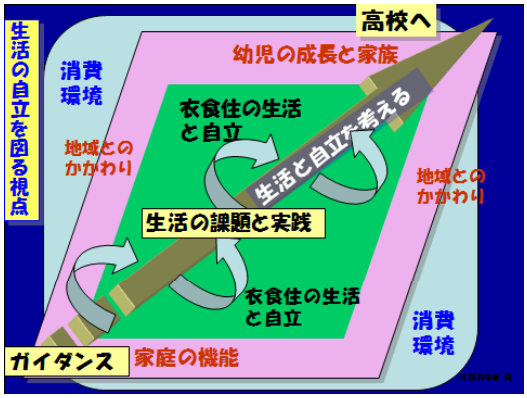
・ＡからＤまでの内容をすべての生徒に履修させることとするが、「生活の課題と実践」に関する指導事項を設定し、３つの事項の中から１又は２事項を選択して履修させること
・小学校に指導内容を移行するなどした内容（栄養素の種類と働き、快適な住まい方の工夫に関する内容）や選択項目の一部を必修とした内容（幼児との触れ合い、地域の食材を生かした調理に関する内容等）については、小学校家庭科での指導の状況を踏まえ、適切な時間を配当するなど扱い方を工夫すること

３「指導計画の作成と内容の取扱い」における留意事項

(1) 内容Ａ（１）アについては、小学校家庭科での学習を踏まえ、中学校３学年間の学習の見通しを立てさせるために、第１学年の最初に履修させる**ガイダンス**的な扱いとすること
(2) 道徳教育の目標に基づき、指導の内容及び時期について**道徳の時間などとの関連を考慮**すること
(3) **食に関する指導**については、技術・家庭科の特質に応じて、**食育の充実**に資するよう配慮すること

4　新学習指導要領の趣旨や内容に対応した授業改善

(1) 時間軸と空間軸の視点から内容をとらえること
- 自己と家庭、家庭と社会とのつながりの視点を重視（**空間軸**）
- 「生活と自立を考え、これからの生活を展望する」視点を重視（**時間軸**）
- 小学校までの学習の振り返り
- ３学年間の学習の見通し
- **ストーリー性**のある指導計画



(2) 衣食住やものづくりなどに関する実習等の結果を整理し、考察する学習活動や、生活における課題を解決するために言葉や図表、概念などを使用して考えたり、説明したりするなどの学習活動が充実するよう配慮すること

ここがポイント！

言語活動の充実をとおして、生徒の生活経験に基づき、衣食住や家庭生活にかかわるさまざまな言葉が、生徒にとって実感の伴うものとなるよう、指導を工夫する。

5　３つの基軸の視点による授業改善

(1)「キャリア教育」の視点から

自分の成長と家族や、家庭と家族関係、幼児の生活と家族に関する学習を通して、家族の一員として成長する自分を自覚し、自己の成長を喜ぶ視点を大切にする。

(2)「コミュニケーション能力を育む教育」の視点から

生活の自立を図る

ここがポイント！

家庭生活を総合的にとらえる視点から、家族の生活と関連させながら衣食住などの内容を取り扱うことを一層重視する。

学習内容について保護者に知らせる、学習したことを家庭で実践する課題を出すなど、家庭との連携を図ることを通して、コミュニケーション能力を育む。

(3)「地域や伝統、文化を踏まえた教育」の視点から

今回の改訂では、生活文化の継承と発展の視点から、「地域又は季節の食材を利用することの意義」や「地域の伝統的な行事食や郷土料理を扱うこともできる」「和服の基本的な着装を扱うこともできる」ことが示されている。

例：身近な食材として山口県産の野菜を取り上げ、それぞれの栄養的な特徴、調理の工夫、旬の時期などについて学習し、野菜料理レシピ集を作成する。
（岩国レンコン、美東ゴボウ、千石台ダイコンなど）

例：山口県の伝統料理の例として、「けんちょう」「瓦そば」などを取り上げ、由来や調理法を調べ、調理する。

例：浴衣の着装を経験し、和服に関心をもつ。

6　３つの基軸の視点による展開例

◇キャリア教育の視点からの展開例

ここがポイント！

＊　中学生の時期は、生活の自立をめざす中で、人々に支えられて生活していることに気付くとともに、自分も家庭生活を支える一員としての自覚をもつことが大切です。家庭分野の目標にある「これからの生活を展望して」という言葉は、将来にわたって自立した生活を営む見通しをもつことを示しています。家族の一員として成長する自分を自覚し、自己の成長を喜ぶ視点を大切にしながら指導することが重要です。

＊　「ガイダンス」の時間には、小学校での学習が中学校での学習にどのようにつながるのかを確認するとともに、その後の題材の指導計画と関連付け、生徒に学習の見通しをもたせることが重要です。題材の終末や、学期末、学年末などに、学習を振り返って身に付けた力を確認し、新たな課題を見出す活動を設定することで、それぞれの学習内容を「生活の自立」という視点から価値付けることができます。第３学年の学年末には「ガイダンス」の学習と関連付けて３学年間の学習を振り返るとともに、卒業後の生活への展望をもたせ、キャリア教育の視点から、家庭科の学習をつなげていきましょう。

１　題　　材　　めざせ！生活の自立　　第１学年　　Ａ（１）ア　ガイダンス

２　主　　眼

小学校での学習や家庭生活を振り返る活動を通して、自己の成長に気付くとともに、これからの家庭科の学習について見通しをもち、生活の自立をめざして、学習に意欲的に取り組もうとする態度を養う。

３　学習過程

学 習 内 容・学 習 活 動	指導上の留意点
１　小学校の「家庭科」で学習したことについて話し合う。 ・できるようになったこと ・学習したが、まだ十分にできないこと ・小学校の学習の発展としてやってみたいこと キャリア教育 生徒が生活を自立して営めるようにするとともに、自分なりの工夫を生かして生活を営むことをねらいとする観点から、技術・家庭のガイダンスを技術分野と連携して行う方法も考えられます。	○小学校での学習を具体的に想起させ、それぞれにつながる中学校での学習に期待感をもたせるようにする。 ○小学校によって、経験した学習活動が異なっている場合は、「身に付けた力」という視点から整理する。 授業改善の視点 校区内の小学校と連携し、小学校で学習した内容を確認したり、製作したもの等についての資料を借りたりして、生徒に提示することで、具体的なイメージをもたせることができます。小学校の教科書を持参させてもよいでしょう。
２　中学校で学ぶ家庭科の内容について知る。 ・家族・家庭と子どもの成長 ・食生活と自立 ・衣生活・住生活と自立 ・身近な消費生活と環境	○教科書などを資料として、３学年間で学習する内容の概略を説明する。 ○技術分野との関連（教科のねらいと分野のねらい、授業時間数、評価等）についてもふれるようにする。

３　「生活の自立」という視点から、家庭分野の学習について考える。 ・自分ひとりでできること ・家族の手助けを得ながらできること ・家族に依存していること ⇩ ・自立できるようになりたいこと ・家族のためにできるようになりたいこと	○「生活の自立」をキーワードとして、生徒自身の生活から、できるようになりたいことを具体的に想起させるようにする。 ○炊事や洗濯などのいわゆる「家事」にのみ注目している生徒には、家庭生活全般について考えるよう助言する。 ○生徒の各家庭の状況など、プライバシーには十分配慮する。 ○生徒が挙げたことを３学年間の題材の指導計画に位置付けて示し、学習への意欲を高める。
４　本時の学習活動を振り返り、これからの学習への意欲をもつ。	○「家庭分野の学習」への見通しと意欲をもつことができたかを評価し、これからの学習を本時の学習とつなげていくことを確認する。

キャリア教育

例えば、「生活の自立」といった３年間を通して学習を振り返るキーワードを設定し、その後の学習で継続して使用することで、それぞれの学習をガイダンスとつなげることができます。

コミュニケーション能力　言語活動の充実　キャリア教育

生活の課題と実践　～指導計画にどのように位置付けるか～

「生活の課題と実践」は学習した知識と技術などを活用し、これからの生活を展望する能力と実践的な態度を育むことの必要性から新たに設定されました。生徒の興味・関心等に応じて課題を設定し、主体的に実習や調査などの学習活動に取り組み、計画、実践、評価、改善という一連の学習活動を重視した問題解決的な学習を進めることは、生活の自立をめざす上でも重要です。指導計画のどこに、どのように位置付けるかによって、活用する知識や技術は異なります。学校の実状や生徒の実態に応じて計画しましょう。

実習や調査は、主に家庭で実施することとなりますが、家庭での実践を直接把握することは困難ですので、計画及び実践後の評価、改善については、授業の中で、グループで検討したり、発表の機会を設けたりして、実践の成果や課題が明確になるよう配慮する必要があります。この機会を、コミュニケーション能力を育む教育を推進する場として積極的に活用しましょう。（ただし、生徒のプライバシーには十分配慮してください。）技術分野と連携して、プレゼンテーションソフト等を活用した発表を行ってもよいでしょう。

ＩＣＴ活用

また、家庭分野の学習内容や「生活の課題と実践」のねらい等について、家庭に十分周知を図り、家族を巻き込んだ実践とすることで、家庭の中でコミュニケーション能力を育てることができ、授業でのコミュニケーション能力の育成にもつながってきます。

学習評価の在り方と指導要録の改善について

中学校　技術・家庭（家庭分野）

１　評価の観点

(1) 教科の目標

※下線は変更点

【教科の目標】
　生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技術の習得を通して、生活と技術とのかかわりについて理解を深め、進んで生活を工夫し創造する能力と実践的な態度を育てる。

(2) 学力の３要素と評価の観点

学力の３要素	評価の観点（新）	「技術・家庭」の観点
①基礎的・基本的な知識及び技能 ②思考力、判断力、表現力等 ③主体的に学習に取り組む態度	○関心・意欲・態度 ○思考・判断・表現 ○技能 ○知識・理解	○生活や技術への関心・意欲・態度 ○生活を工夫し創造する能力 ○生活の技能 ○生活や技術についての知識・理解

◆評価の観点改善のポイント

・評価の観点の名称は現行のものと同一であるが、教科の目標及び学力の３要素を踏まえて整理されていることに留意
・思考・判断したことを、その内容を表現する活動と一体的に評価することが重要なポイント

２　評価の観点及びその趣旨　【家庭分野】

※下線は変更点

【家庭分野の目標】
　衣食住などに関する実践的・体験的な学習活動を通して、生活の自立に必要な基礎的・基本的な知識及び技術を習得するとともに、家庭の機能について理解を深め、これからの生活を展望して、課題をもって生活をよりよくしようとする能力と態度を育てる。

新

※下線は変更点

観　点	趣　旨
生活や技術への関心・意欲・態度	衣食住や家族の生活などについて関心をもち、これからの生活を展望して家庭生活をよりよくするために進んで実践しようとする。
生活を工夫し創造する能力	衣食住や家族の生活などについて見直し、課題を見付け、その解決を目指して家庭生活をよりよくするために工夫し創造している。
生活の技能	生活の自立に必要な衣食住や家族の生活などに関する基礎的・基本的な技術を身に付けている。
生活や技術についての知識・理解	家庭の基本的な機能について理解し、生活の自立に必要や衣食住や家族の生活などに関する基礎的・基本的な知識を身に付けている。

３　各観点の趣旨と留意事項

○生活や技術への関心・意欲・態度

・分野目標の改訂に伴い「これからの生活を展望して」を追加。将来にわたって自立して生活を営む見通しをもって、自らの課題の解決に意欲的に取り組むことを重視
・「生活を工夫し創造する能力」との関連を明確にするために、「進んで活用しようとする」を「進んで実践しようとする」に改訂
・「など」には「Ｄ消費生活と環境」の内容を示している。（他の観点も同様）

○生活を工夫し創造する能力

・課題の解決を目指して工夫する過程を含めて評価することが重要
・言語活動を中心とした表現に係る活動等をとおして評価することに留意
・「自分なりに」とは、生徒がそれぞれの状況に応じて自分の考えを生かして課題解決を図ることを重視する教科の特質を踏まえている。

○生活の技能

・日常食の調理や衣服の選択と手入れ、布を用いたものの製作などに関する基礎的・基本的な技術を身に付けているかなどについて評価

○生活や技術についての知識・理解

・中学生の食生活と栄養や住居の機能と住まい方、家庭生活と消費などに関する基礎的・基本的な知識を身に付けているかなどについて評価

４　評価規準作成のための参考資料のポイント

□家庭分野においては、学習指導要領の内容の「Ａ家族・家庭と子どもの成長」「Ｂ食生活と自立」「Ｃ衣生活・住生活と自立」「Ｄ身近な消費生活と環境」の各指導事項ごとに「内容のまとまりごとの評価規準に盛り込むべき事項」と「評価規準の設定例」を作成し、「評価規準の設定例」には学習指導要領解説の内容が反映されている。これを参考に、具体的な評価規準は、指導計画に応じて各学校で設定する。

□学習指導要領の指導事項の内容によっては「評価規準に盛り込むべき事項」を設定していない観点がある。

・各家庭での実践そのものについては、原則として評価の対象とせず、実践に向けた計画や実践を基にした発表や話合いなど、学校で行われた学習活動を評価の対象とする。
・調理計画や製作計画の作成は「計画を立てることができる」という技能ではなく、それまでに身に付けた知識や技能を活用して「計画を工夫する」ということから、「生活を創意工夫する能力」の観点から評価する。
・「生活の課題と実践」については「生活や技術への関心・意欲・態度」「生活を工夫し創造する能力」の観点から評価する。「生活の課題と実践」を指導計画のどこにどのように位置付けるかによって、評価規準の設定の具体は異なってくる。

□３学年間を通して生徒に身に付けさせる力を明らかにし、技術分野と合わせながら、長期的な視点に立ち、指導計画と一体となった評価計画を作成する。限られた授業時数で４観点を評価することを踏まえ、題材の設定にあたっては、例えばＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄの指導事項を組み合わせること、小学校で学習したことを十分に踏まえたものとすること、などの工夫が求められる。

中学校　外国語

1 「目標」

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

ここがポイント！

(1)外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深める。
(2)外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
(3)聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

2 「内容」

○授業時数の増加　　：各学年で１０５時間から１４０時間に増加
○指導する語数の増加：「９００語程度まで」から「１２００語程度」へ増加
○文法事項等の指導内容は概ね従来のままで、新たな指導事項の追加はほとんどない

言語活動の充実を通じて、言語材料の確実な定着とコミュニケーション能力の一層の育成を図る。

		追加された内容
言語活動	聞くこと	○まとまりのある英語を聞いて、概要や要点を適切に聞き取ること
	話すこと	○与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること
	読むこと	○話の内容や書き手の意見などに対して感想を述べたり、賛否やその理由を示したりなどすることができるよう、書かれた内容や考え方などをとらえること
	書くこと	○語と語のつながりなどに注意して正しく文を書くこと ○自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと

※言語材料：「音声」、「文字及び符号」、「語、連語及び慣用表現」及び「文法事項」

ここがポイント！

(1)学習内容を上級学年において言語活動の中で繰り返し(スパイラル)学習することで言語材料の確実な定着を図る。
(2)４技能のバランスを重視するとともに、「発信力」「活用力」等も重視する。
(3)「理解の段階にとどめる」といったいわゆるはどめ規定がなくなり、表現の段階まで指導する。
(4)文法事項については、従来の「文型」に変えて「文構造」という用語を使用し、「言語活動と効果的に関連付けて指導する。
(5)教材について、「伝統文化」、「自然科学」に関する例示が新たに追加された。

3 「指導計画の作成と内容の取扱い」における留意事項

(1)小学校における外国語活動との関連に留意して、指導計画を適切に作成する。
(2)外国語科においては、英語を履修させることを原則とする。
(3)道徳の時間などとの関連を考慮しながら、外国語科の特質に応じて適切な指導をする。
・世界の中の日本人としての自覚を高める。
・国際的な視野に立ち、世界の平和と人類の幸福に貢献する。

4　新学習指導要領の趣旨や内容に対応した授業改善

自らの考えなどを相手に伝えるための「発信力」の育成

４技能を総合的に育成する。				
○発音と綴りを関連付けて指導する。	○文法事項の指導を言語活動と効果的に関連付けて指導する。 ○文法事項を相互に関連付けながら指導する。	○日本語と英語との違いに留意して指導する。	○学習内容について学年間で繰り返し（スパイラル）学習し定着を図る。 ○言語活動の時間を十分にとる。	○与えられたテーマについて簡単なスピーチをさせる。 ○文と文のつながりなどに注意して文章を書かせる。

ここがポイント！

(1)「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」の４技能の総合的な指導を通して、これらの４技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成すること
(2)教材の題材や内容については、学習に対する関心や意欲を高め、外国語で発信する内容の充実を図る等の観点を踏まえ、４技能を総合的に育成するための活動に資すること
(3)文法指導を言語活動と効果的に関連付けて指導すること
(4)授業時数の増加分を「繰り返し学習」や「活用する学習」に充てること

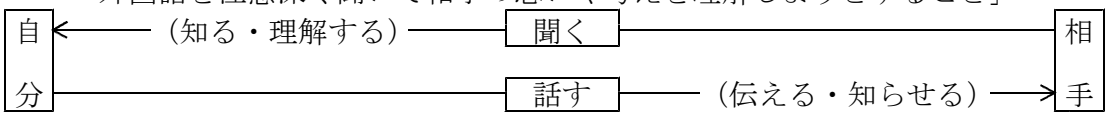
5　３つの基軸の視点による授業改善

(1)「キャリア教育」の視点から

○外国語を通じて、多様なものの見方や考え方があることを知る。
○相手を尊重する姿勢と自分なりの意見をもつこと及びそれを表現することの重要性について理解する。
○新しいことを受け入れる柔軟性、あいまいさを許容できる耐性や、チャレンジ精神を養う。
○Think globally,act locally.といった言葉に表されるように、地球的視野でものを考え、地域に根ざした活動ができるようにする。

(2)「コミュニケーション能力を育む教育」の視点から

「外国語を注意深く聞いて相手の思いや考えを理解しようとすること」



「思いを伝えることの難しさや大切さを実感しながら、
積極的に自分の思いや考えを伝えようとすること」

ここがポイント！

(1)国際社会においては、積極的に自分の意見を表明することが重要であることを理解させるとともに、主体的に発表しようとする姿勢を養う。
(2)コミュニケーションの面白さや大切さに気付くようにする。
(3)言葉によるコミュニケーションだけにとどまらず、表情やジェスチャーといった非言語の重要性についても理解させるようにする。

(3)「地域や伝統、文化を踏まえた教育」の視点から

○国語と外国語、日本の文化と外国の文化について、体験を通して知り、違いと共通点に着目させることで、国語や我が国の文化についての理解を一層深めるようにする。
○日本人としてのアイデンティティの確立に資するように配慮する。

6　３つの基軸の視点による展開例

◇コミュニケーション能力を育む教育の展開例

ここがポイント！

＊　身に付けた一定の基本的な知識や技能を活用して実際にコミュニケーションを行うには、積極的に自分の考えを相手に伝えたいという思いや、相手の考えを理解したいという思いが高まる活動を仕組むことが重要です。

＊　文法事項の指導を言語活動と関連付けて指導する工夫が重要です。

＊　言語活動の時間を十分にとる必要があります。

１　単 元 名　　何個持ってる？（第１学年）

２　主　　眼　　数を尋ねる表現を理解するとともに、数を尋ねる表現を使って、友達が持っているものの数を尋ねることができる。

３　学習過程

学習内容・学習活動	指導上の留意点
１　英語で挨拶する。 ・学級全体で ・教師と生徒で ・生徒同士で	○全体で挨拶した後、様々な組み合わせによる受け答えを繰り返し行うことで、英語の発音やリズムに慣れるようにする。
コミュニケーション能力 形式的な定型表現のやり取りではなく、自分の気持ちに即した表現を選んで話したり、天候や季節に合わせた話題なども付け加えて話すようにすることで、言葉が気持ちや考えを伝える手段である認識を高めるように配慮しましょう。	
２　前時の復習をしながら、本時で学習する新出単語、新出文法を理解する。	○複数の物を示しながら、既習表現である“What's this?”を使い、新出単語や数を尋ねる表現について提示して、物とそれを表す言葉、表現と概念をセットで理解させる。
授業改善の視点 新出単語や文法事項については、単語を示して意味を確認したり表現を文字で示して解説したりするだけではなく、単語や表現を、それらが意味する概念と結び付けるように工夫することにより、言葉本来がもつ意思伝達の役割についての認識を高めましょう。	
授業改善の視点 指導者が新出単語や新出文法事項を含む独自のOral Presentationを行い、新出単語や文法事項の提示や理解を図ることも考えられます。 I like Japanese pop music.　I often listen to CDs.　I have some CDs in my bag.　How many CDs do I have?　One, Two, three, four, five.　I have five CDs in my hands now.　And I have many CDs in my house.	
３　教科書本文の内容を理解する。 How many ～s do you have?	○内容の要点がつかめたかどうかをチェックするワークシートを予め配布しておき、指導者のOral Presentationを聞いて記入させることで確実な理解を図る。

授業改善の視点	“True or False Question”や“Questions & Answers”を実施して生徒の理解状況を確認することも考えられます。
4　新出単語の発音練習や本文の音読練習をする。	○発音については、CDを聞かせたり教師の発音を聞かせたりして、正確な音をつかませた後、定着を図る。 ○ピクチャーカードやフラッシュカードを使用して、飽きずに練習できるよう配慮する。 ○音読をペアで行うことで自然な雰囲気が出るようにする。
授業改善の視点 指導の一貫性の観点から、小学校で実施したキーワード・ゲームを活用して、新出単語に慣れさせることも考えられます。また、本文の音読については、Chorus Reading、Shadowing、Read & Look-upなど様々な方法があり、生徒の実態に合わせた方法で指導することが重要です。１年生では文字を書くことに慣れる活動も重要であることから、本文の空欄部分を埋める活動や、Dictationを実施してもよいでしょう。	
5　新出文法事項に慣れる。 Book, Book. How many books? How many books do you have? Seven. Seven. I have seven books. How many ～s do you have? ・教師が指定したもの ・生徒自身が尋ねたいもの （CD, book, comic book, pencil, handkerchief　など）	○小学校で学習したチャンツを活用することで、表現をまとまりとして身に付けるようにする。 ○尋ねるものを教師の指定したものに変えて前後左右の仲間と受け答えを練習した後、生徒自身が尋ねたいものについて、教室内を移動して尋ねさせるようにする。 ○誰が何をどれくらい持っているか等、尋ねた内容について、英語で記録できるワークシートを用意する。
コミュニケーション能力 自分で選んだり、考えたりする活動を授業に取り入れることで、生徒が意欲的に活動に取り組むことができるようにするとともに、英語を、自分の意思を伝えたり、相手を理解したりするコミュニケーションの手段としてとらえさせることが重要です。	
6　振り返りをする	○よかった点を取り上げてほめることにより、次時の学習への意欲付けとする。
授業改善の視点	生徒による授業評価を実施して、教師が意図したことが生徒に伝わっているかを確認し、授業改善に役立てましょう。
7　挨拶をする	○日本語での授業での終わりの挨拶の後、英語で別れの挨拶をする。

学習評価の在り方と指導要録の改善について

中学校　外 国 語

１　評価の観点

(1)　教科の目標と評価の観点

※下線は変更点

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

(2)　学力の３要素と評価の観点

学力の３要素	評価の観点（新）	「外国語」の観点
①基礎的・基本的な知識及び技能 ②思考力・判断力・表現力等 ③主体的に学習に取り組む態度	○関心・意欲・態度 ○思考・判断・表現 ○技能 ○知識・理解	○コミュニケーションへの関心・意欲・態度 ○外国語表現の能力 ○外国語理解の能力 ○言語や文化についての知識・理解

２　評価の観点及びその趣旨

新

※下線は変更点

観　点	趣　旨
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	コミュニケーションに関心をもち、積極的に言語活動を行い、コミュニケーションを図ろうとする。
外国語表現の能力	外国語で話したり書いたりして、自分の考えをなどを表現している。
外国語理解の能力	外国語を聞いたり読んだりして、話し手や書き手の意向などを理解している。
言語や文化についての知識・理解	外国語の学習を通して、言語やその運用についての知識を身に付けているとともに、その背景にある文化などを理解している。

※現行の趣旨から「初歩的な」という言葉が削除されている。

３　各観点の留意事項

(1) コミュニケーションへの関心・意欲・態度

・積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を身に付けているかどうかを評価するものであり、生徒が実際にコミュニケーションを行おうとしている状況を観察するなどして評価する必要がある。

(2) 外国語表現の能力

・外国語で話したり書いたりして、自分の考えなどを表現する能力を評価するという考え方や、自ら伝えようとする内容が大切である点は現行と同じである。

・音声によるコミュニケーションを重視する現行学習指導要領下では、評価においても「話すこと」による能力に重点をおいていたが、今回の改訂により「話すこと」「書くこと」いずれの能力も重視することになる。

(3) 外国語理解の能力

・外国語を聞いたり読んだりして、話し手や書き手の意向などを理解する能力を評価する。

・評価において「聞くこと」による能力に重点をおいていた現行に対し、「聞くこと」「読むこと」いずれの能力も重視することになる。

(4) 言語や文化についての知識・理解

・語彙や音声、文法事項などの外国語をコミュニケーションの手段として使用する上で必要となる言語の運用についての知識などを身に付けているか、言語の背景にある文化などを理解しているか、などを評価する。

４　内容のまとまりごとの評価規準に盛り込むべき事項及び評価規準の設定例

(1) 英語の目標

①初歩的な英語を聞いて話し手の意向などを理解できるようにする。
②初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする。
③英語を読むことに慣れ親しみ、初歩的な英語を読んで書き手の意向などを理解できるようにする。
④英語で書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする。

(2) 評価規準設定の考え方

「内容のまとまりごとの評価規準に盛り込むべき事項」においては、４つの観点ごとに、以下に示すコミュニケーション能力を捉える視点が２つずつ設けられており、それに従って評価規準を設定する。それぞれの趣旨は次のとおりである。

ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度

①言語活動への取組
自分の考えや気持ち、事実などを積極的に相手に伝えようとしたり、相手の考えなどを理解しようとしたりしているかどうか、つまり、コミュニケーションに取り組んでいる様子を評価する。したがって、そこで用いられている英語の正確さや適切さ、すなわち、運用上の能力などを評価するものではない。
②コミュニケーションの継続
コミュニケーションが途切れそうになる時には、さまざまな手だてを用いてコミュニケーションを継続する努力が必要である。その努力を評価する。

イ 外国語表現の能力

①正確さ
強勢、イントネーション、文法などの言語についての知識を活用して、英語で正しく表現することができるかを評価する。
②適切さ
実際のコミュニケーションで誤解なく伝えるために、場面や状況に応じてふさわしい表現を選択したり、適切な声の大きさや速さで話したり、まとまりのある文章を書いたりすることができるかどうかをなどを評価する。

ウ 外国語理解の能力

①正確さ
強勢、イントネーション、文法などの言語についての知識を活用して、英語の内容を正しく理解することができるかを評価する。
②適切さ
場面や状況に応じた聞き方や、目的に応じた読み方をして英語を理解することができるかを評価する。

エ 言語や文化についての知識・理解

①言語についての知識
言語活動を行う中で、そこで用いられている強勢、イントネーション、文法事項など、英語の仕組みについての知識を評価する。
②文化についての理解
社会的知識や百科事典のような内容ではなく、技能の運用で求められる、言語の背景にある文化に限って評価する。すなわち、理解していないとコミュニケーションに支障をきたすような文化的背景を対象とする。

※「英語」では４つの観点にそれぞれ２つの視点が設定されている。そのうち、それぞれ「内容のまとまり」で評価できる規準は、以下の表の○についてである。これらを年間の指導計画に基づいて評価することとなる。

規準 ＼ 内容	コミュニケーションへの関心・意欲・態度		外国語表現の能力		外国語理解の能力		言語や文化についての知識・理解	
	取　組	継　続	正確さ	適切さ	正確さ	適切さ	言　語	文　化
聞く	○	○	－	－	○	○	○	○
話す	○	○	○	○	－	－		
読む	○	○	○	○	○	○		
書く	○	○	○	○	－	－		

（注）　紙面の都合上、省略した形で記述したものがあります。

中学校　道　徳

1 「目標」

道徳の時間においては、道徳教育の目標に基づき、各教科、総合的な学習の時間及び特別活動における道徳教育と密接な関連を図りながら、計画的、発展的な指導によってこれを補充、深化、統合し、道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚を深め、道徳的実践力を育成するものとする。

ここがポイント！

(1) 学校の教育活動全体で行う道徳教育を補充、深化、統合すること
(2) 道徳的価値及びそれに基づいた**人間としての生き方についての自覚**を深めること
(3) 道徳的実践力を育成すること

2 「内容」

○道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の内容
○４つの視点（自分自身、他の人とのかかわり、自然や崇高なものとのかかわり、集団や社会とのかかわり）による内容項目の構成

ここがポイント！

内容項目	内容項目に関する主な改善点
23→24	新たな項目：２の(6) 「多くの人々の善意や支えにより、日々の生活や現在の自分があることに感謝し、それにこたえる」

3 「指導計画の作成と内容の取扱い」における留意事項

(1) **校長の方針の下に、道徳教育の推進を主に担当する教師（「道徳教育推進教師」）**を中心に、全教師が協力して道徳教育を展開するため、道徳教育の全体計画と道徳の時間の年間指導計画を作成する。
(2) 道徳の内容は、道徳の時間はもとより、各教科、総合的な学習の時間及び特別活動においてもそれぞれの特質に応じて適切に指導を行う。
(3) 道徳の時間における指導に当たっては、次の事項に配慮する。
①**道徳教育推進教師**を中心とした指導体制を充実する。
②**職場体験活動**やボランティア活動、自然体験活動などの体験活動を生かすなど、創意工夫ある指導を行う。
③先人の伝記、自然、伝統と文化、スポーツなどを題材とし、生徒が感動を覚えるような**魅力的な教材の開発や活用**を通して、創意工夫ある指導を行う。
④自分の考えを基に、書いたり討論したりするなどの**表現する機会を充実**し、自分とは異なる考えに接する中で、自分の考えを深め、自らの成長を実感できるよう工夫する。
⑤**情報モラルに関する指導**に留意する。
(4) **道徳の時間の授業を公開**したり、**保護者や地域の人々の積極的な参加や協力**を得たりするなど、家庭や地域社会との共通理解を深め、相互の連携を図る。

ここがポイント！

・校長の方針を明確にし、学校として取り組む重点や特色を明確にする必要がある。
・道徳教育推進教師を位置付け、学校として一体的な推進体制をつくる。
・道徳教育の全体計画に具体性をもたせ、より活用しやすいものとするために、**各教科等の道徳性の育成に関して、「内容及び時期」を含めた計画を作成**する必要がある。

4　新学習指導要領の趣旨や内容に対応した授業改善

(1)　道徳の時間の特質を生かした授業の充実

【道徳的価値の自覚を深める】
○道徳的価値について理解する。
○自分とのかかわりで道徳的価値がとらえられる。
○道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題が培われる。

【人間としての生き方についての自覚を深める】
○いかによりよく生きるかという人間としての生き方を主体的に模索し始める時期を迎える。
○人間とは何かということについての探求とともに深められる。

自分の考えを基に表現する機会の充実　言語活動の充実

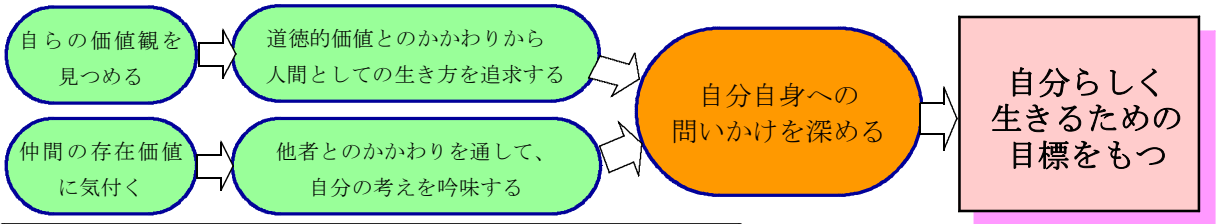
ここがポイント！
道徳教育の要である道徳の時間の目標と特質をとらえて、教師の一方的な押し付けや単なる生活経験の話合いなどに終始することがないよう特に留意し、指導の効果を高める工夫をすることが必要である。

(2)道徳の時間における指導方法の工夫
①多様な読み物資料の特徴を生かした指導の手順や学習過程の工夫をする。
・登場人物への共感を中心とした展開　　・感動を大事にした展開
・迷いや葛藤を大切にした展開　　・批判的な見方を含めた展開　等
②生徒の思考を深めるために発問構成を工夫するとともに、生徒相互の考えを深める話合いでは、適切な指導・助言を行い、効果的に展開できるように工夫する。
③自らの考えを深めたり整理したりする書く活動や動作化・役割演技等の表現活動を効果的に行う。
④体験活動の中での心の動きと道徳の時間における指導とが響き合うようにする。
⑤各教科等と道徳の時間の指導のねらいが同じ方向をもつとき、相互に関連を図ることにより、効果を一層高める。

5　３つの基軸の視点による授業改善

(1)「キャリア教育」の視点から

学ぶ過程を振り返る活動を通して、「道徳的な成長」を自ら実感する。



(2)「コミュニケーション能力を育む教育」の視点から

①自分の考えをもつことのできる課題を設定
②各自の考えを基に書いたり討論したりして、比較・検討する活動を設定
③自分とは異なる考えに接する中で、自らの成長を実感できる活動を設定

ここがポイント！
コミュニケーションを図ることにより、互いに自分の思いや考えを伝え合うことが可能となり、それらを共有したり質的に高めたりすることができる。
知的なコミュニケーションは、「表現すること」によって支えられ、また、知的なコミュニケーションを通して表現の質が高められ、相互にかかわり合いながら学習を充実させることにつながる。

(3)「地域や伝統、文化を踏まえた教育」の視点から

地域に残る魅力的な教材を多様に開発し、その効果的な活用に努める。

6　３つの基軸の視点による展開例

◇キャリア教育、コミュニケーション能力を育む教育の展開例

ここがポイント！

＊　キャリア教育の視点から、道徳的価値に基づいた人間としての生き方を追求したり、仲間の考えをもとに自分への問いかけを深めたりしながら、社会の一員としての自分の役割を果たすことができるようにすることが必要です。

＊　コミュニケーション能力を育む教育の視点から、生徒一人ひとりの考えを基に書いたり話し合ったりする学習活動を効果的に位置付けるとともに、自分とは異なる考えを基にして、比較・検討することを通して、自らの成長を実感できるようにすることが必要です。

１　主　題　　きまりの遵守　　４（１）社会の秩序・規律

２　資　料　　「二通の手紙」（文部省）

３　ねらい

元さんの行為に対する佐々木さんの考え方について話し合うことを通して、きまりを守り、自分の義務を果たそうとする心情を養う。

４　学習過程

学習活動・主な発問・予想される生徒の反応	指導上の留意点
１　身近なきまりを思い出し、自分の考えを発表する。 ○身近なきまりにはどのようなものがあるか。そのことについて、どう思うか。 ・登下校や学校生活など学校のきまりがある。 ・条令や法律など世の中のきまりがある。 ・必要だけど、厳しすぎると感じることもある。	「心のノート」の活用例 「縛られたくないのはみんな同じ」（p92.93）にあるきまり等を提示する。
２　資料「二通の手紙」を読み、元さんの行為に対する佐々木さんの考え方について話し合う。 ○資料を読んで、気になったことはどんなことか。 ・親子に感謝されたのに元さんが処分されたこと。 ・元さんがはればれとした顔で処分を受けたこと。 ・佐々木さんが元さんの思いを引き継いでいること。	○生徒が資料を読んで気になったことを手がかりにして、話し合う内容を焦点化する。
①多様な読み物資料の特徴を生かした指導 資料を読んだ後、生徒の気になったことや感動したことなどを取り上げ、生徒が道徳的価値を自分の問題として受け止めることができるようにすることも効果的です。	授業改善の視点
○佐々木さんが、元さんの処分に納得いかなかったのはなぜか。 ・姉弟のことを思ってしたことだから。 ・母親からも感謝の手紙が届いたから。 ・この件で問題は起こっていないから。 ○処分を受けた元さんはどんな様子だったか。	○佐々木さんの納得いかなかった理由を問うことにより、姉弟のことを思った行為で、母親からも感謝されていることを確かめる。 ○元さんのはればれとした顔でいた姿をもとにして、道徳的な山場を明らかにする。
○佐々木さんが、元さんから学んだことはどんなことだと思うか。 ・規則を守らないと、多くの人の迷惑になる。 ・規則に従わないと、どんなことが起こるか分からない。 ・お客さんに接する者のもつ責任は、とても大きい。	○生徒の発言（下線例）を確かめたり、問い返したりすることにより、日常の生活の場面を想起できるようにして話合いを進める。

授業改善の視点

②生徒の思考を深める発問等の教師の働きかけ

生徒の発言の中で、詳しく聞いてみたいことなどがありながら、そのまま取り扱われることがあります。本時では、「他にどんな迷惑があるのか。」「規則に従わないと、どんな困ることが起こるのか。」などと問い返すことにより、ねらいに迫ることが大切です。

・登場人物の生き方や考え方について、自分の考えをもつことができるようにすることが大切です。
・仲間の多様な考えをもとに、共通点や相違点を明らかにして比較・検討することができるよう話合い活動の進め方を工夫してみましょう。

コミュニケーション能力

3　元さんの行為や考え方に対する自分の考えをまとめ話し合う。 ○あなたが、元さんの考え方から学んだことはどんなことか。 ・社会人として規則を守ることが大切だということ。 ・自分の気持ちに左右されてはならないこと。 ・自分の義務を果たすことが大切だということ。	○自分の考えの変容を確かめるために、ワークシートに自分の考えをまとめるとともに、仲間から学んだことを書き加えるようにする。
4　補助資料を読み、本時の学習を振り返る。	○補助資料から「義務を果たすこと」に関連する「すてきな言葉」を見つけ、各グループで紹介する時間を確保する。

③体験活動等とのつながり

道徳的価値についての考えを深めることができるよう補助資料として職場体験活動をまとめた資料や先輩の講演記録等を準備することが効果的です。

授業改善の視点

・登場人物の生き方や考え方について考えるとともに、自分の将来の目標や夢などについてもまとめることが効果的です。
・自分の役割や義務について考えを深め、今後の取組に生かすことが大切であることを確かめるなどして、道徳的実践につながるよう働きかけることが大切です。

キャリア教育

５　資料分析

■元さんの行為・佐々木さんの心情を分析した例

場面	①若者の入園を断る佐々木さん	②動物園の規則を破った元さん	③母親から手紙をもらった元さん	④処分を受けた元さん
元さんの行為	－	入園終了後に姉弟を入園させた。	母親から感謝の手紙をもらった。	「初めて考えさせられることばかりです。」はればれとした顔で職場を去っていった。
佐々木さんの心情	かわいそうだという気持ちはわかる。	元さんの判断に異存はなかった。	－	どうしても納得いかなかった。「元さんのあの日の言葉がよみがえってくるんだよ。」

①資料の構造をとらえる。

元さんの行為を見た佐々木さんの「きまり」に対する考え方が描かれている。

佐々木さんの心情の変化や元さんの考え方に着目して、生徒に考えさせたいことを検討する。

②中心的な発問を構想する。

中心的な発問を考える際には、次のような視点から検討する。

○資料に描かれている道徳的価値や授業のねらいにつながるものであるか。

○生徒が考えたいことやこだわりそうなことであるか。

中学校　総合的な学習の時間

1 「目標」

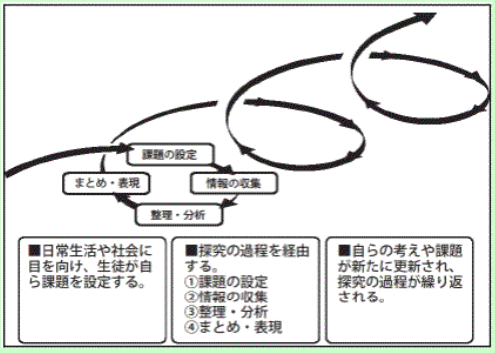
横断的・総合的な学習や**探究的な学習**を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、**協同的**に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。

ここがポイント！

①横断的・総合的な学習、探究的な活動の充実　②教育課程における位置付けを明確化
③各教科、道徳、特別活動のそれぞれの役割を整理　④発達段階を考慮し、学習活動例示

◎探究的な学習における生徒の学習の姿

総合的な学習の時間における探究的な学習とは、問題解決的な活動が発展的に繰り返されていく右図のような一連の学習活動のことである。



◎教育課程における位置付け

基礎的・基本的な知識・技能の定着やこれらを活用する学習活動は、教科で行うことを前提に、横断的・総合的な学習、探究的な活動となるよう充実を図る。

◎総合的な学習の時間と各教科、道徳、特別活動のそれぞれの役割を整理

特に、総合的な学習の時間と**特別活動との関連**について、学習指導要領の第１章総則の第３の５において総合的な学習の時間の学習活動による特別活動への代替の考え方が記された。

◎発達段階を考慮し、各学校段階の学習活動の例示

各学校が定める学習課題として、横断的・総合的な課題、生徒の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題に加えて、**職業や自己の将来に関わる課題**などが例示された。

2 「各学校において定める目標及び内容」

総合的な学習の時間の特質

(1) 目標
　各学校においては、第１の目標を踏まえ、各学校の総合的な学習の時間の目標を定める。
(2) 内容
　各学校においては、第１の目標を踏まえ、各学校の総合的な学習の時間の内容を定める。

3 「指導計画の作成と内容の取扱い」における留意事項

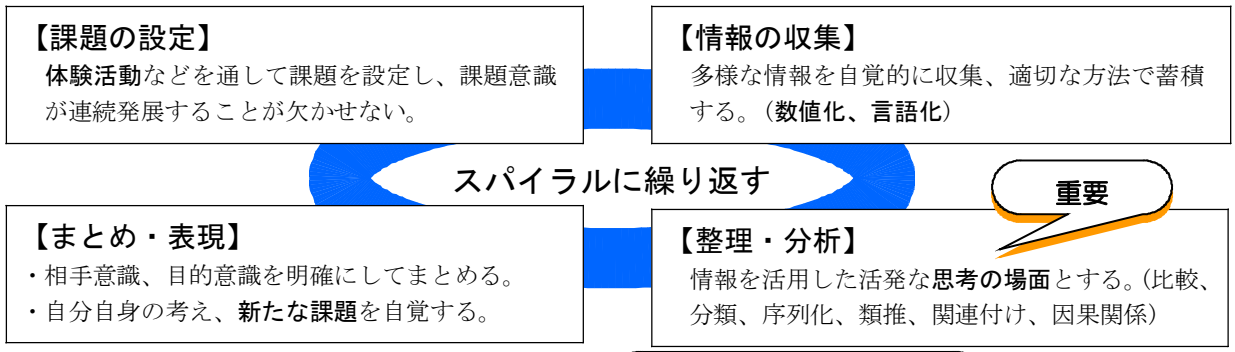
(1) 全体計画及び指導計画において、目標及び内容、育てようとする資質や能力及び態度、学習活動、指導方法や指導体制、学習の評価の計画（７項目）を示すこと
(2) 全体計画及び指導計画作成に当たっては、小学校における取組を踏まえること
(3) 生徒の学習状況に応じて教師が適切な指導を行うこと
(4) 職業や自己の将来に関する学習を行う際には、問題の解決や探究活動に取り組むことを通して、自己を理解し、将来の生き方を考えるなどの学習活動が行われるようにすること

ここがポイント！

「第１の目標を踏まえ」とは、総合的な学習の時間の目標の５つの要素をすべて含む必要があることを意味している。

4　新学習指導要領の趣旨や内容に対応した授業改善

(1)学習過程を探究的にすること



(2)他者と協同して取り組む学習活動の充実

言語活動の充実

■意見を出し合う
■見通しや計画を確かめ合う
■他者の考えなどを受け入れる

→

■課題意識の高まり
■学習活動の発展
■問題解決や探究活動の質の高まり
■異なる見方が解決への糸口

ここがポイント！

自己との対話を重ねつつ、他者や社会、自然や環境と共に生きる積極的な「開かれた個」であることが求められる。他者と協力しながら身近な地域社会の課題の解決に主体的に参画し、その発展に貢献しようとする態度を育むことが必要である。

5　３つの基軸の視点による授業改善

(1)「キャリア教育」の視点から

総合的な学習の時間においては、横断的・総合的な学習や探究的な活動を通すこと　→（資質、能力、態度の育成）→　自己の生き方を考える

○実社会に出て働くことの意味を考える。
○働くことや職業を自分とのかかわりで考えることや、自己の将来を展望することにより自己の生き方を考えることに直接つながる。

(2)「コミュニケーション能力を育む教育」の視点から

○人々や社会、自然とかかわる体験活動を積極的に取り入れる。
○体験したことや調べたことをまとめ、発表し合う。
○協同的に取り組む学習活動を行うことで、生徒の学習の質を高める。

(3)「地域や伝統、文化を踏まえた教育」の視点から

○地域の歴史、伝統、文化、行事、生活習慣、産業、経済などにかかわる各地域や各学校固有の諸課題に取り組む。

ここがポイント！

総合的な学習の時間の内容として取り上げ、具体的な学習活動としていくことには大きな価値がある。

地域ならではのよさ、特色、古くからの伝統や習慣、地域の気候や風土を生かした特産物や工芸品　→

①よりよい郷土の創造にかかわって生じる地域特有の課題
②生徒が地域における自己の生き方とのかかわりで考え、よりよい解決に向けて地域社会で行動していくことができる課題

6　３つの基軸の視点による展開例

◇コミュニケーション能力を育む教育、キャリア教育の展開例

ここがポイント！

＊　コミュニケーション能力を育むためには、総合的な学習の時間において体験したことや収集した情報を言語により分析したり、まとめたり、表現したりするなど、言語活動等を、問題の解決や探究活動の過程に適切に位置付けることが大切です。

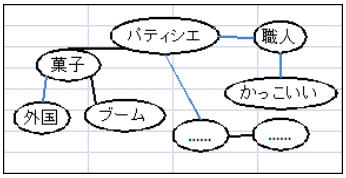
＊　キャリア教育の充実に向けては、横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自己の生き方を具体的に考えることができるようにすることが大切です。

１　単　　元　　夢へ、チャレンジ！（中学校第２学年）

２　単元の目標

職業調べや職場体験学習を通して、働くことの意味を追求し、社会の一員として自己の将来について考える態度を養う。

３　単元の学習過程

主 な 学 習 活 動	指導上の留意点
課題の設定 事例①あこがれから課題を設定する。 ・町工場で生産しているものを実際に手に取り、生き生きと働いている人の話を聞く。	○生徒が自ら課題意識をもち、その意識が発展するよう、生産者の話を聞くなど意図的な働きかけを行う。 キャリア教育 生徒に、「自分も深くかかわりたい」「その人に近づきたい」というあこがれを抱かせ、働くよさや価値を実感させることが大切です。
 自転車の変速機をつくり、国内だけでなく、外国の自転車メーカーにも輸出しています。多くの方に愛されていると思うと、仕事に生きがいを感じます。 地域の様々な職業を調べよう。	○これまでの職業に関する自分の考えとの意識のずれや隔たりを対比できるよう、学習プリント等を準備する。
事例②職業のイメージを広げて、課題を設定する。 ・ウェビング等で調べたい職業に対する自分の中のイメージを広げ、グループで紹介し合う。 	ＩＣＴ活用 職業に対するイメージがもてない生徒には、事前にインターネット等を利用して調べるよう助言する。 ○課題意識を高めるため、職業に対する自分の考えと友達の考えを比較する等の場を設定する。 ウェビング等で、イメージを広げ、可視化することで、課題を明らかにし、話合いを活性化することができます。 コミュニケーション能力
興味のある職業を調べよう。	
情報の収集 事例①インタビュー等で情報を収集する。 ・地域にある工場などの職場を訪問し、フリップボードを提示してインタビューする。	○インタビューで情報を収集する際には、相手が答えやすいよう、フリップボードを活用するなど工夫する。

・専門的な人から必要な情報、思いや願いを直接得ることで、考えを深める。

国語等との関連を図り、学んだことを生かすことが大切です。

授業改善の視点

事例②体験活動を通して、情報を収集する。
・地域にある職場で、様々な人と接しながら、職場体験をする。

○生徒が連絡する前に、訪問先に趣旨を伝え、事前に調整しておく。
○体験したことを日記等に記録し、整理・分析の際の手がかりとするなど、体験だけで終わることのないよう配慮する。

キャリア教育

実際に体験することを通して、人々の思いや願いを直接感じることができ、職業への考えを深めることができます。

整理・分析

事例①情報を表やグラフで整理・分析する。
・調査したことを、統計的な手法を用いて整理し、まとめる。

○どのような情報が、どの程度収集されているかを把握しておく。

授業改善の視点

数学で身に付けた統計処理等の手順を生かして、集めた情報を、整理・分析することで、思考する活動へと高めることができます。

事例②体験して得た情報をワークシート等で整理・分析する。
・同じ職場体験をした生徒同士が得た情報を付箋に書き、共有する。

○表やグラフを整理して、他者と協同的に話合いを進めることで、分かったこと、疑問に思ったことを共有できるようにする。

キャリア教育

集めた情報を、「できたこと、できなかったこと」「仕事内容と必要な知識・技能」「働いている人の思いや願い」等の多面的な視点で、整理・分類することで、職業に対する考えを深めることができます。

まとめ・表現

事例①小学校６年生を対象に、体験発表会を開く。
・自分の考えを明確にし、ポスター等にまとめる。

○校区内の小学校を訪問し、総合的な学習の時間やキャリア教育の視点を共有しておく。
○調べた動機、目的、方法、結果、考察などを工夫して表現し、探究的な学習の過程が分かるよう工夫する。

小学校6年生を対象にすることで、相手意識や目的意識を明確に表現することができます。

コミュニケーション能力

事例②レポートにまとめる。
・収集した情報を、再構成して自分の考えをレポートにまとめる。

○自分自身の考えをレポートにまとめ、表現することで、新たな疑問や体験してみたいことなど、課題を更新することができるようにする。

キャリア教育

自分の思いや願いを、自己の生活につなげ、生かしていくことが大切です。

学習評価の在り方と指導要録の改善について

中学校　総合的な学習の時間

１　評価の基本的な考え方

(1)　総合的な学習の時間の目標

横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。

(2)　評価の基本的な考え方

総合的な学習の時間における生徒の学習状況の評価は、生徒がこの時間の目標について、どの程度実現しているのかという状況を把握することによって、適切な学習活動に改善するためのものである。

(3)　生徒の学習状況を評価するために

各学校は、「総合的な学習の時間」の目標を踏まえ、各学校の総合的な学習の時間の目標や内容を定めることから、生徒にどのような力が身に付いたのかを把握するため

① 各学校において評価の観点を適切に定める
② 生徒の学習の姿を基にした評価規準を設定する

◆　評価のポイント１

生徒の学習状況についてある一定の望まれる姿を想定し、それと生徒の学習状況とを照らし合わせて考え、この学習活動で育てようとする資質や能力及び態度が適切に育まれ、内容が学ばれているのかを、生徒の学習状況から丁寧に見取ることが大切である。

２　評価の観点

指導要録においては、各学校が自ら設定した目標や内容を踏まえて観点を設定し、それに即して文章の記述により評価を行っており、新しい学習指導要領下においても引き続き現在の評価の在り方が維持される。評価の観点については、総合的な学習の時間の目標を踏まえ、各学校において具体的に定めた目標や内容に基づいて定める。以下の三つの例を参考にしながら、それぞれを組み合わせたり、具体化したりして、各学校に応じた観点を設定することが重要である。

	観　　点
①学習指導要領に示された総合的な学習の時間の目標に基づいた観点の例	・よりよく問題を解決する資質や能力 ・学び方やものの考え方 ・主体的、創造的、共同的に取り組む態度 ・自己の生き方
②学習指導要領に示された「学習方法に関すること」「自分自身に関すること」「他者や社会とのかかわりに関すること」等の視点に沿って定めた資質や能力及び態度に基づいた観点の例	・課題設定の力、情報収集の力（学習方法） ・将来展望の力(自分自身) ・社会参画の力(他者や社会とのかかわり)
③各教科の評価の観点との関連を明確にした観点の例	学習活動にかかわる「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」

３　評価規準の設定

生徒の学習状況を丁寧に見取り、その評価を指導や学習活動の改善につなげるには、単元計画の作成時に指導と評価の計画を立てておくことが重要であり、そこに評価規準を位置付けることが考えられる。

⑴評価規準設定の留意点

○単元の評価規準は評価の観点を基に、単元の目標や内容、育てようとする資質や能力及び態度を踏まえて設定する。
○単元の評価規準は、単元の学習活動を通して、どのような力を身に付けたのかを子どもの学習状況から適切に把握する。
○指導計画では、子どもが取り組む学習活動との関連においてその場面で子どもに期待される学習の姿を想定し、具体的に評価規準として示す必要がある。
○だれがどのような方法で評価するのかを明確にしておくことも大切である。
○単元の計画に評価の欄を設け、学習活動の展開に沿って明示することなどが考えられる。

⑵具体的な評価規準の設定

具体的な学習活動のまとまりごとの評価規準としては、例えば、次のように設定することが考えられる。

【例】「生息している生物を採取し、他の川と比較するなどして分析している」
「調査結果などをグラフや地図に表している」
「自らの生活を見直し、排水を減らすなどの活動に取り組んでいる」
「友達と協力して調査したり、地域の人から話を聞いたりして調べている」
「地域の人と一緒に川を守る活動に参画している」

４　評価の方法

総合的な学習の時間における生徒の具体的な学習状況の評価の方法については、信頼される評価の方法であること、多様な評価の方法であること、学習状況の過程を評価する方法であることの三つが重要である。

⑴信頼される評価とするために

“教師の適切な判断に基づいた評価が必要”
・あらかじめ指導する教師間において、評価の観点や評価規準を共通理解する。
・各学校において定められた評価の観点を、一単位時間ですべて評価しようとするのではなく、一定程度の時間数の中において評価を行うように心がける。

⑵多様な評価とするために

“異なる評価方法や評価者による多様な評価を適切に組み合わせることが重要”
・発表や話合いの様子、学習や活動の状況などの観察による評価
・レポート、ワークシート、ノート、作文、論文、絵などの制作物による評価
・学習活動の過程や成果などの記録や作品を計画的に集積したポートフォリオによる評価
・一定の課題の中で身に付けた力を用いて活動することによるパフォーマンス評価
・評価カードや学習記録などによる生徒の自己評価や相互評価
・教師や地域の人々等による他者評価

⑶学習状況の過程を評価するために

“評価を学習活動の終末だけではなく、事前や途中に適切に位置付けて実施することが大切”
・各過程に計画的に位置付け、すべての過程を通して、生徒の実態や学習状況を把握し、適切な指導に役立てる。

◆評価のポイント２

総合的な学習の時間の評価においては、その生徒の内に個人として育まれているよい点や進歩の状況などを積極的に評価することや、それを通して生徒自身も自分のよい点や進歩の状況などに気付くようにすることが大切である。

中学校　特別活動

1 「目標」

望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う。

ここがポイント！

(1)「特別活動の充実が子どもたちの資質や能力の育成に十分つながっていない」との指摘や、人間関係の希薄化等の子どもたちの課題を踏まえた改訂であること
(2) 小学校の特別活動との接続と発展を図るという観点から目標や内容を見直したこと
(3) 目標に**「人間関係」**を新たに加えたこと
(4) **学級活動・生徒会活動・学校行事で育てたい態度や能力を目標として新たに示した**こと

2 「内容」

学級活動
『共通事項』
…いずれの学年でも取り扱う内容
（1）学級や学校の生活づくり(３項目)
（2）適応と成長及び健康安全(９項目)
（3）学業と進路(5項目)

生徒会活動
（1）生徒会の計画や運営㊕
（2）異年齢集団による交流㊕
（3）生徒会諸活動についての連絡調整
（4）学校行事への協力
（5）ボランティア活動などの社会参加

・学級活動の内容について、３つの内容から整理した。
・集団の適応に関わる問題、思春期の心の問題、社会的自立をめざす教育の充実などの観点から改善を図った。

・生徒会活動の内容について明確に示し、生徒の自発的･自治的活動の充実を図った。

ここがポイント！

・集団での取組や意思決定を進める自発的・自治的な活動形態と、集団で取り組みながら個人が選択し行動する自主的・実践的な活動形態のどちらに力点を置くかなど指導の工夫を行う。
・**「集団としての意見をまとめる活動」、「自分たちで決まりをつくって守る活動」、「人間関係を形成する力を養う活動」**を充実する。

学校行事
（1）儀式的行事
（2）文化的行事（←学芸的行事）
（3）健康安全・体育的行事
（4）旅行・集団宿泊的行事
（5）勤労生産・奉仕的行事

新たな改善事項

・本物の文化や芸術にふれたり鑑賞したりする活動、文化の継承に寄与する活動などの充実の観点から、「学芸的行事」を「文化的行事」に改めた。
・５種類の行事はすべての学年で実施する。
（学習指導要領の基準性から）

ここがポイント！

・体験活動の充実を図り、**勤労生産・奉仕的行事では、特にキャリア教育の一環として、職場体験を重点的に推進する。**高い教育効果が期待できることから一定期間にわたる実施が望まれる。
・体験活動を通しての気付きを振り返る、まとめる、発表し合うなどの活動を充実する。

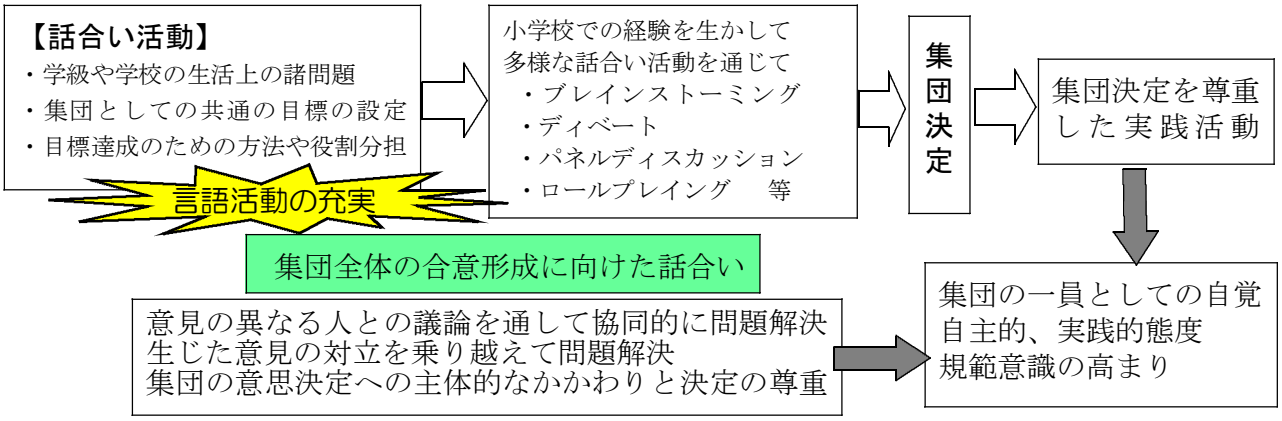
3 「指導計画の作成と内容の取扱い」における留意事項

(1) 特別活動の**全体計画、各活動・学校行事の年間指導計画を作成**する。
(2) **総合的な学習の時間の学習活動により、学校行事の実施に替える**ことができる。
(3) 長期休業中の学級活動の実施は認められていない。年間35週以上にわたって行う。
(4) 生徒のよりよい適応や成長等のための**ガイダンス機能の充実**を図る。
(5) 全教師が指導計画について共通理解を図り、学校全体で組織的に指導に当たる。

4　新学習指導要領の趣旨や内容に対応した授業改善

(1)話合い活動の充実

「集団として意見をまとめる」「自分たちで決まりをつくって守る」



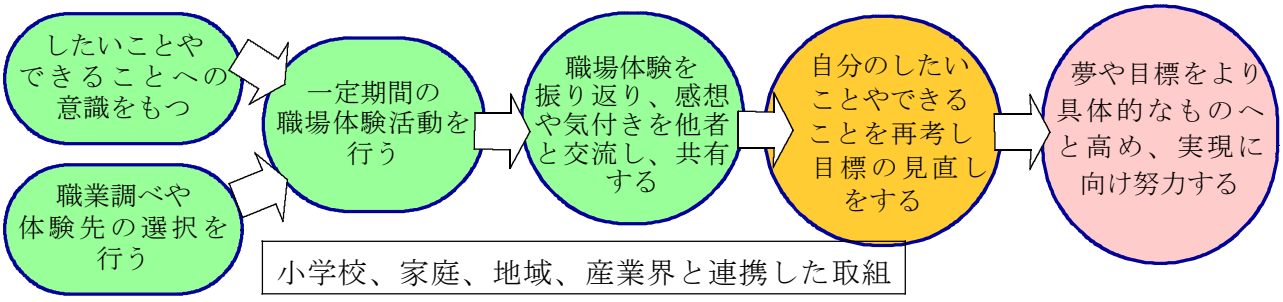
ここがポイント！

・教育課程にかかわることなど生徒に任せられないことを明確にして指導に当たる。
・できるだけ生徒の司会で進行させ、司会や議長をすべての生徒が体験できるように配慮する。
・生徒会活動の充実のために、学級活動と生徒会活動とを関連させながら指導する。

5　３つの基軸の視点による授業改善

(1)「キャリア教育」の視点から

夢や目標をもち、その実現に向けて努力していこうとする意欲を高める職場体験活動



ここがポイント！

・体験活動を通じて、「したいこと」や「できること」などを意識させ、夢や目標を育む。
・夢や目標の実現に向け、学ぶ意義を理解させ、学習意欲を高めるようにする。

(2)「コミュニケーション能力を育む教育」の視点から

①事前・事後の活動を充実させた体験活動
　・体験活動を通して気付いたことなどを発表し合う場を設定
　・保護者や地域の人、小学生等への報告会等の実施
②違いを乗り越え合意形成をめざす話合い活動
　・安易に多数決に頼らず、本音を伝え合う中で合意に向かう話合い活動の実施
　・話合い活動の時間確保のためのしくみ作りや指導計画の工夫

ここがポイント！

コミュニケーションは人間関係の基をつくるもので、特別活動を支えるものだと言える。
各学校で特活主任を中心に話合い活動の進め方を共通理解して学校全体で取り組むことや、互いに認め合い、安心して自分の思いが発言できる支持的風土の学級づくりが大切である。

(3)「地域や伝統、文化を踏まえた教育」の視点から

見学や体験などを通して地域の伝統･文化に親しみ、関心を高める授業
例：地域の自然や文化財を守る取組や啓発活動についての話合い（学級活動、生徒会活動）

6　３つの基軸の視点による展開践例

◇キャリア教育、コミュニケーション能力を育む教育の展開例

ここがポイント！

＊　話合い活動を通して自己決定したことに沿って努力することを通して自己指導力を高めるために、学級活動後の実践とその振り返りを計画的に行う必要があります。
＊　体験を通して「自分がしたいこと」や「自分ができること」、「社会が求めていること」を考え、その実現に向けた自己決定ができるようにすることが大切です。
＊　体験活動の事後活動では、互いの思いの共有や、互いの違いやよさに気付くことができるようにし、互いに認め合い高め合おうとする態度を育てることが大切です。

１　題　　材　自立へ向けた生活の見直し（第２学年 学級活動（３）ア 学ぶことと働くことの意義の理解）

２　ね ら い

職場体験学習の感想や学んだことを話し合う活動を通して、今後の自分の在り方について考え、自分を伸ばすために目標をもって努力しようとする意欲をもつことができる。

３　活動過程

	生徒の活動	指導上の留意点
事前の活動	《問題の発見・問題意識の共有化》 ○職場体験の報告会等を実施する。 ○学んだことや感想をまとめる。	○報告会原稿等を活用してまとめることを通して、自分がこれからがんばらなくてはならないことを意識できるようにする。キャリア教育 職場体験の様子の報告だけでなく、体験を通じて考えたことを話し合わせることが、一人ひとりの今後の目標づくり等につながり、効果がより高まります。
本時の活動	1　本時のねらいをつかむ。	○職場体験を今後の生活に生かすための話合いを行うことを確認し、意欲付けを図る。
	題材：職場体験で学んだことをこれからの生活に生かそう	
	2　職場体験での感想や学んだことを話し合う。コミュニケーション能力 ・あいさつの大切さが分かった ・自分にできることに気付いた ・ものづくりにかかわってみたい ・○さんはそう思ったのか ・△さんの考え方はすばらしいな	○一人ひとりの発言について、関連した発言をつなぎ、共感できるようにする。キャリア教育 ・意見交換を通して、思いを共有させたり、様々な考えにふれさせたりすることで、職場体験での自分の思いをより深めさせることが大切です。 ・「自分のしたいこと」「自分ができること」を意識させることが、夢や目標づくりにつながります。
	3　自分を振り返って考えたことを話し合う。 ・物事にもっとねばり強く取り組まなければならない ・あいさつや返事はほめられたからこれからも心がけよう	○自分に足りないことや改善すべき点、一層伸ばしたいことなど、職場での体験をもとにした振り返りのポイントを助言する。キャリア教育 体験を通して自分を振り返ることで、「社会が求めていること」も意識させ、生活の見直しや今後の目標づくりにつなげることが大切です。
	4　話合いをもとに、今後取り組む目標を決める。授業改善の視点	○ワークシートに各自の目標を、具体的な行動目標として書くよう助言する。【自己決定】
	・話合いの内容を参考に、これからの取組を自己決定させることがポイントです。 ・自己決定したことを継続して実行できるように、具体的に書かせることが大切です。具体的な行動目標にすることで、事後の活動での自己評価もしやすくなります。	
事後	《自己指導力を高める》 ○ワークシートを活用して定期的に振り返りを行う。	○各自が目標を意識して生活したり、互いに励まし合ったりすることができるように、目標の掲示や、場面場面での肯定的な評価を行う。

◇コミュニケーション能力を育む教育の展開例

ここがポイント！

＊　学級活動での話合いは、主として話合い活動を通して集団目標等を集団決定する学級活動（１）と、話合い活動を通して個人の目標を自己決定する学級活動（２）（３）との違いを理解した上で、議題・題材選びや話合い活動を進める必要があります。

＊　学級活動（１）では、安易に多数決に頼らず、考え方の違いや多様性を認め合い、折り合いを付けながら集団決定していくような話合いが望まれます。

１　議題（題材）学級生活を見直し、よりよい学級をめざそう
（第１学年　学級活動（１）ア　学級や学校における生活上の諸問題の解決）

２　ね ら い　学級生活を振り返り、現状や問題点とその方法について話し合う活動を通して、協力してよりよい学級をつくっていこうとする意欲をもつことができる。

３　活動過程

	生徒の活動	指導上の留意点
事前の活動	《問題の発見》 ○学級生活アンケートを実施する。 ○学級目標とアンケート結果を比較し、各自が問題点を見つける。 ○学級委員が議題として提案する。	○帰りの会等を活用して事前の活動を実施する。 ○議題に対する考えを書かせておき、進んで話合いに参加できるようにする。 コミュニケーション能力
本時の活動	1　本時のめあてをつかむ。 2　議題と提案理由の説明をし、話合いの流れを確認する。	○話合い参加のめあてを提示し、意識付けを図る。 コミュニケーション能力
	議題：問題点を改善し、よりよい学級をつくるためのスローガンをつくろう	
	3　話合い活動を行う。 （１）現状の把握と原因の考察 ・給食準備が遅い ・授業中の私語が多い　など （２）改善策の検討 ・目標や見通しをもって取り組む ・互いに注意し合う　　など	○事前に書いた考えをもとにグループでの話合いや全体発表、質疑や意見交換によって、問題意識の共有化を図る。 ○改善策をグループごとに考え、具体性や効果について全体で意見交換することで、より効果的な改善策が考えられるようにする。
	・グループでの話合い→全体での話合いという流れの繰り返しにより、話合いへの抵抗が少なくなり、活発な意見交換が行われるようになります。 コミュニケーション能力 ・グループごとの話合いにより、多くの生徒が進行係を体験することができます。	
	（３）スローガンの作成 ◆折り合いを付ける話合い活動 コミュニケーション能力	○改善策のキーワードをもとに考えたスローガンを出し合い、全員で一つにまとめることができるようにする。**【集団決定】**
	すぐに多数決で決めてしまわず、互いの思いを聞き合い、意見を述べ合いながら、互いの考えを認め合い、よいところをつなぐなどしながら、できるだけ集団決定できるように進めることが大切です。もちろん時間の制限等により、多数決が必要となる場合もあります。	
	4　集団決定したことを確認する。 5　先生の話を聞く。	○議事の確認の後、話合いのめあてに対する評価も行い、次の話合いへの意欲付けを図る。
事後	《話し合ったことの実現》 ○掲示用スローガンを作成する。 ○スローガンによる振り返りをする。	○生徒の様子を肯定的に評価し、スローガンを意識して生活できるようにする。 ○帰りの会などで、定期的に振り返りを行う。

学習評価の在り方と指導要録の改善について

中学校　　特別活動

１　特別活動の目標

※下線は変更点

望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。

２　特別活動の改訂や評価の改善の考え方

〈特別活動の課題〉
「学校生活の満足度や楽しさと深く関わっているが、**育てたい力が十分育成されていない**」

〈学習指導要領改訂のポイント〉
身に付けたい資質や能力を育てるために各活動や学校行事で新たに目標を規定

〈評価の改善〉
どのような力を身に付けたかを適切に評価し、指導に生かすことが重要な課題
①**各学校において評価の観点を定め、**それに照らして実現状況を評価する。
②具体的な事実等については、「総合所見及び指導上参考となる諸事項」に記す。

ここがポイント

・特別活動では「どんな活動をするのか」は検討されるが、「なぜその活動をするのか」「どんな力をつけるのか」の検討は十分とは言えない。各学校が評価の観点を定めることで「特別活動でどのような子どもを育てるのか」を検討し、育てるべき力を育てていくための改善である。

３　評価の観点及びその趣旨と留意事項

評価の観点は、特別活動の全体目標や、各活動・行事の目標を踏まえ、参考資料の「評価の観点及びその趣旨」の例を参考に、**各学校において定める**。

評価の観点に基づいて「どんなことを評価するのか」を表したもの

評価の観点（例）	評価の観点の趣旨（例）
集団活動や生活への関心・意欲・態度	学級や学校の集団や自己の生活に関心をもち、望ましい人間関係を築きながら、積極的に集団活動や自己の生活の充実と向上に取り組もうとする。
集団や社会の一員としての思考・判断・実践	集団や社会の一員としての役割を自覚し、望ましい人間関係を築きながら、集団活動や自己の生活の充実と向上について考え、判断し、自己を生かして実践している。
集団活動や生活についての知識･理解	集団活動の意義、よりよい生活を築くために集団として意見をまとめる話合い活動の仕方、自己の健全な生活の在り方などについて理解している。

特別活動の各活動・学校行事に積極的に取り組もうとしているか

これまでの経験や知識等を活用して集団や社会の一員として適切に考え、判断し、実践しているか

特別活動を進める上で必要なことを理解しているか

・学習指導要領において国の基準として規定された目標や内容に即して確実に育てたい資質や能力を育成する。

・特別活動で「どんな力を身につけさせるのか」を共通理解し、ねらいを明確にした指導を展開する。

内　　容	観　点	学　年	1	2	3
学級活動	・集団活動や生活への関心･意欲･態度 ・集団や社会の一員としての思考･判断･実践 ・集団活動や生活についての知識･理解 **※省略して「関心･意欲･態度」だけを書かない。** **※観点の変更に対応できるよう、余白を残しておく。**		○		
生徒会活動					
学校行事				○	

ここがポイント

・評価の観点は、学級活動、生徒会活動、学校行事のすべてを評価するものであるから、特別活動全体に係る評価の観点を記入する。
・参考例は３観点だが、各学校で重点化した内容等をふまえ、育てたい力に即してより具体的に定めることも可能。「どんなことを評価するのか」を具体的にした評価の観点の趣旨も作成する。
・評価できない観点や趣旨とならないよう、各学校で作成する際は観点や趣旨を検討し、きちんと説明できることが大切である。
・評価の観点は、**各学校が**指導要録に記載する。
・内容ごとに観点及び趣旨に照らして、十分満足できる状況と判断される場合に○をつける。

４　評価規準の作成

□評価の観点の趣旨に照らして、どんな子どもの姿が**「十分満足できる状況」**であるかを示す。
□「学級活動(１)(２)(３)」「生徒会活動」「学校行事(１)(２)(３)(４)(５)」を内容のまとまりとし、それぞれの評価規準を作成する。評価規準作成のための参考資料では、例示した３つの観点について、それぞれに評価規準に盛り込むべき事項を作成している。これらを参考に、内容のまとまりごとの評価規準を作成する。
　・参考例では、「進んで→意欲的に→自主的に→自主的、自律的に」など、小学校から発達段階に応じて文言が変化している。これらを踏まえ、「自律的」「全校的な視野」「参画」など小学校にはない文言などに留意して評価規準を作成する。

５　評価計画と評価方法

□評価に当たっては、育てたい子ども像を明確にした全体計画をもとに、評価規準や発達段階に即して指導すべきことを明確にするなど、具体的な指導計画を作成することが大切になる。
　・学級活動（１）では、評価規準を作成して一定の期間の中で適切な評価の時期や回数について検討する等の工夫が考えられる。
　・学級活動（２）（３）は１時間ごとに指導する内容が違うので、１時間ごとの評価が望ましい。
　・生徒会活動と学校行事は、基本的に内容のまとまりごとの評価規準で対応する。学校として特に重点を置く活動や行事についての評価規準を作成することも考えられる。
□主観による観察のみにならないよう、ワークシートの活用、アンケート、自己評価や相互評価、チェックリストなどを活用するなど、具体的な評価方法を研究する。特に、特別活動は、学級担任以外の教師が担当することも多いので、各活動や学校行事における評価体制についても研究する必要がある。
　・指導と評価の一体化を図ることが大切。「知識・理解」では集団活動の意義の理解について評価するのなら、何のためにその集団活動をするのかを指導しなければならない。
　・自己評価カードによる自己の変容や成長の自覚や、相互評価カードの活用により友達のよいところを認め合うことなどの積み重ねで、子どもの長期的な変容を把握する。
□評価規準に即した指導と評価を継続的に行うとともに、目立たないところでがんばる姿や望ましい言動、集団としての成長や変容などを、教師の言葉がけなどの評価によって価値付ける。
□教科書等のない特別活動において、学校全体が同じ方向に向かって進んでいくためには、めざす子ども像や指導の目安を共通理解することが不可欠である。

学習評価の在り方と指導要録の改善について

中学校　　行動の記録

１　「行動の記録」の評価の基本的な考え方

(1)各教科、道徳、総合的な学習の時間、特別活動、その他学校生活全体にわたって認められる生徒の行動について、項目ごとにその趣旨に照らして十分満足できる状況にあると判断される場合には、○印を記入する。

(2)改正教育基本法や学校教育法の一部改正の趣旨を反映していく。

「行動の記録」の項目の設定に当たって踏まえるべき事項

□教育基本法第２条（教育の目標）
□学校教育法第21条（義務教育の目標）
□学習指導要領
　＊第１章総則
　＊第３章道徳に示す道徳の目標や内容、内容の取扱いで重点化を図ることとしている事項
　＊第１章総則において示す体育・健康に関する指導等

２　道徳の内容の取扱いにおける重点化

(1)道徳教育で重点化を図る事項

> 自他の生命を尊重し、規律ある生活ができ、自分の将来を考え、法やきまりの意義の理解を深め、主体的に社会の形成に参画し、国際社会に生きる日本人としての自覚を身に付けるようにすること
>
> （「第３章　道徳」の「第３　指導計画の作成と内容の取扱い」の１）　解説編p79～

(2)「評価項目及びその趣旨」について

□「道徳の内容」などで大きな変更はなく、従前の項目で適切な評価が可能であることから、評価項目の変更はない。
□「評価項目を説明した趣旨」については、道徳の内容項目の配列の入れ替え等に対応した修正はあるが、大きな変更は行っていない。

３　参考例を踏まえた創意ある評価

(1)学校の設置者は、国や都道府県教育委員会等の示す参考例を踏まえて、「行動の記録」の項目を適切に設定することが求められる。その上で、各学校は、教育目標を踏まえた項目を加えることも適当である。

(2)子どもの行動に関する所見については具体的に「総合所見及び指導上参考となる諸事項」に記すことも重要である。